

2023 年アートクリティック活動の報告

アートクリティック

伊藤洋子、酒井正志、玉崎紀子、服部厚子

I. 2023 年アートクリティック活動の報告

2023 年のアートクリティック月例会（例年通り 8 月例会は不開催）で報告された観劇演目のリストを以下に記載する。リストの中には、演劇のほか、Metropolitan Opera Live Viewing や National Theatre Live Streaming など、劇場公演の中継録画の映画館上映と映画も含まれている。コロナが下火になり、自由な外出も可能になってきたが、月例会は研究所会議室での対面参加とズームによる参加の双方で開催した。従来、リストの編集は玉崎紀子研究員が担当していたが、昨年より服部厚子特任研究員に交代した。参加者一同、お二人のご尽力に感謝する。

◆ 2023 年 1 月アートクリティック例会 1/25 (水) 13:30 ～

1. MET Live Viewing 『椿姫』 作曲：ジュゼッペ・ヴェルディ 指揮：ダニエレ・カッレガーリ
演出：マイケル・メイヤー ネイディーン・シエラ (Sop.) ミッドランドスクエアシネマ 12/18
(日) 10:50～ (塹江)
2. オペラ『カルメン』ウクライナ国立歌劇場 作曲：ジョルジュ・ビゼー 指揮：ヴィクトル・オリニク 愛知県芸術劇場大ホール 1/9(月) 15:00～ (塹江)
3. 演劇『守銭奴 ザ・マナー・クレイジー』作：モリエール 翻訳：秋山伸子 演出：シルヴィウ・ブルカレーテ 出演：佐々木蔵之介、壤 晴彦 森ノ宮ピロティホール 1/7 (土) 14:00～ (服部)
4. National Theatre Live 『レオポルト・シュタット』作：トム・ストッパード 演出：パトリック・マーパー TOHO シネマズ赤池プライムツリー 1/6 (金) ～ 1/12 (木)
(伊藤 1/10、服部 1/11、玉崎 1/12)
5. 演劇『リチャード 2 世』SPAC 作：シェイクスピア 演出：寺内亜矢子 静岡芸術劇場 1/14
(土) ～ 1/29(日) 14:00 ～ (伊藤 1/21、服部 1/22)

◆ 2023 年 2 月アートクリティック例会 2/22 (水) 13:30 ～

1. 演劇『ジョン王』彩の国シェイクスピアシリーズ 翻訳：松岡和子 上演台本・演出：吉田鋼太郎（彩の国シェイクスピア・シリーズ芸術監督）出演：小栗 旬、横田栄司、吉田鋼太郎 御園座 1/28 (土) 12:30 ～ （酒井）
2. 演劇『港町 memorial・II ～ラビローニへ～／すべて我が胎内に在り波に映え 光、風、空、心／』作・演出：北村想 損保ジャパン人形劇場ひまわりホール 1/27 (金) 14:00 ～ （服部）
3. オペラ『トスカ』藤原歌劇団公演 作曲：ジャコモ・プッチーニ セントラル愛知交響楽団 指揮：鈴木絵理奈 出演：小林厚子 愛知県芸術劇場大ホール 2/4 (土) 14:00 ～ （酒井）
4. 演劇『歌うシャイロック』作・演出：鄭義信 出演：岸谷五朗、中村ゆり 京都南座 2/10 (金) 12:00 ～ （服部）
5. 木下歌舞伎『桜姫東文章』作：鶴屋南北 監修・補綴：木ノ下裕一 脚本・演出：岡田利規 出演：成河、石橋静河、武谷公雄 穂の国とよはし芸術劇場主ホール 2/19 (日) 13:00 ～ （服部）
6. 映画『イニシエリン島の精霊』脚本・監督：マーティン・マクドナー 出演：コリン・ファレル 伏見ミリオン座 1/27 (金)～ （伊藤 1/31、服部 1/31）
7. MET Live Viewing 『めぐりあう時間たち』作曲：ケヴィン・ブッツ 世界初演 指揮：ヤニック・ネゼ＝セガン 演出：フェリム・マクダーモット 出演：ルネ・フレミング、ジョイス・ディドナート、ケリー・オハラ ミッドランドスクエアシネマ 2/3 (金)～ 2/9 (木) （塹江 2/7、服部 2/6）
8. National Theatre Live 『かもめ』作：アントン・チェーホフ 脚本：アーニャ・リース 演出：ジェイミー・ロイド 出演：エミリア・クラーク、トム・リース・ハリーズ 2/10 (金)～ 2/16 (木) TOHO シネマズ赤池プライムツリー 2/10 (金)～ 2/16 (木) （伊藤 2/12、服部 2/13）

◆ 2023 年 3 月アートクリティック例会 3/15 (水) 13:30 ～

1. ミュージカル『パジャマゲーム』原作：ジョージ・アボット・リチャード・ビッセル 名古屋市文化振興事業団 2023 年企画公演 翻訳・訳詞・演出：中原和樹 音楽監督・指揮：角田鋼亮 2/18 (土) 11:00 ～、16:00 ～ （玉崎）
2. ダンス『マザー』ピーピング・トム公演 構成・演出：ガブリエラ・カリーソ ドラマトゥルク・演出補佐：フランク・シャルティエ 穂の国とよはし芸術劇場主ホール 2/23 (木) 15:00 ～ （服部）

3. 演劇『ペリクリーズ』演劇集団円公演 作：シェイクスピア 翻訳：安西徹雄 演出：中屋敷法仁 両国・シアター X 3/3 (金) 14:00 ～ (服部)

4. オペラ『ニュルンベルグのマイスタージンガー』びわ湖ホールプロデュースオペラ セミ・ステージ形式 作曲：リヒャルト・ワーグナー 指揮：沼尻竜典 ステージング：粟國淳 出演：青山貴 (Br.) びわ湖ホール 3/2 (木) 13:00 ～ (塹江)

5. オペラ『カヴァレリア・ルスティカーナ』作曲：ピエトロ・マスカーニ、オペラ『道化師』作曲：ルッジェーロ・レオンカヴァッロ 東京芸術劇場と愛知県芸術劇場の共同制作 指揮：アッシャー・フィッシュ 演出：上田久美子 出演：アントネッロ・パロンビ 愛知県芸術劇場大ホール 3/5 (日) 14:00 ～ (伊藤)

6. 演劇『人形の家』SPAC 作：ヘンリック・イブセン 演出：宮城總 静岡芸術劇場 2/11 (土)～ 3/12 (日) 14:00 ～ (伊藤 3/12、服部 3/5)

7. MET Live Viewing『フェドラー』作曲：ウンベルト・ジョルダーノ 指揮：マルコ・アルミリアート 演出：デイヴィッド・マクヴィカー 出演：ソニア・ヨンチェヴァ、ピョートル・ベチャワ ミッドランドスクエアシネマ 3/8 (水) 10:15 ～ (塹江)

8. ミュージカル『バンズ・ヴィジット 迷子の警察音楽隊』原作：エラン・コリリンによる映画脚本 音楽・作詞：デヴィッド・ヤズベック 台本：イタマール・モーゼス 演出：森新太郎 出演：風間杜夫、濱田めぐみ、新納慎也 刈谷市総合文化センター大ホール 3/12 (日) 13:00 ～ (服部)

◆ 2023 年 4 月アートクリティック例会 4/19 (水) 13:30 ～

1. 帰朝報告、イギリス最新演劇評

3 月 14 日 *Romeo and Julie* (National Theatre Dorfman Theatre)

16 日 *Allegiance* (Charing Cross Theatre)

17 日 *Winter's Tale* (Shakespeare's Globe Wanamaker Playhouse)

18 日 *Sylvia* (Old Vic)

23 日 *Hamlet* (National Theatre Dorfman Theatre)

(酒井)

2. 映画『生きる (Living)』監督：オリヴァー・ハーマナス 脚本：カズオ・イシグロ TOHO シネマズ赤池プライムツリー (塹江 3/31、玉崎 4/3、酒井 4/7)

3. National Theatre Live『るつぽ』作：アーサー・ミラー 演出：リンゼイ・ターナー 出演：エリン・

ドハティ、ブレンダン・カウエル 4/14(金)～4/20(木) TOHO シネマズ赤池プライムツリー

(伊藤 4/14、玉崎紀子・紫、服部 4/16)

4. 映画『パリタクシー』監督・脚本：クリスチャン・カリオン 出演：ダニー・ブーン、リーヌ・ヌノー ミッドランドスクエアシネマ 4/7(金)～ (服部 4/10)

5. 講演会、平田オリザ『新しい広場を作るー地域における劇場の役割ー』メニコンシアター Aoi, 4/18(火) (服部)

◆ 2023 年 5 月アートクリティック例会 5/17(水) 13:30 ～

1. 演劇『ミナト町純情オセロ～月がとっても慕情編～』劇団☆新感線 43 周年興行・春公演 作：青木豪 演出：いのうえひでのり 出演：三宅健、松井玲奈 4/20(木) 13:00 ～ (服部)

2. MET Live Viewing『ローエングリン』作曲：リヒャルト・ワーグナー 指揮：ヤニック・ネゼ＝セガン 演出：フランソワ・ジラルド 出演：ピョートル・ベチャワ ミッドランドスクエアシネマ 4/21(金)～4/27(木) 11:10 ～ (塹江 4/22)

3. 演劇『アインシュタインの夢』ふじのくに⇔世界演劇祭 2023 演出：孟京輝 静岡芸術劇場 4/29(土) 13:30 ～ (服部)

4. 演劇『ハムレット (どうしても)』ふじのくに⇔世界演劇祭 2023 翻訳・演出：オリヴィエ・ピィ 静岡芸術公園 野外劇場「有度」 4/29(土) 17:00 ～ (服部)

5. コンサート「モンセラートの朱い本 (Libre Vermill de Montserrat) ～いにしえのスペインで歌い継がれた祈りの調べ～」モンセラート・アンサンブル スタジオフィオーレ 5/6(土) 14:00 ～ (玉崎)

6. ドキュメンタリー映画『アダマン号に乗って』監督：ニコラ・フィリベール 日仏共同制作 伏見ミリオン座 4/28(金)～ (伊藤 5/7、服部 5/8)

7. MET Live Viewing『ファルスタッフ』作曲：ジュゼッペ・ヴェルディ 演出：ロバート・カーセン 指揮：ダニエレ・ルスティオーニ 出演：ミハエル・フォレ ミッドランドスクエアシネマ 5/12(金)～5/18(木) (伊藤 5/12、塹江 5/15)

8. 演劇『帰って来たマイ・ブラザー』シスカンパニー公演 作：マギー 演出：小林顕作 出演：

水谷豊、段田安則、高橋克実、堤真一 御園座 5/12(金) 13:00 ～ (服部)

9. 演劇『透き間』メニコンシアター Aoi トライアルイベント サファリ・P 上演台本・演出：山口茜 メニコンシアター Aoi 5/14(日) 14:00 ～ (服部)

◆ 2023 年 6 月アートクリティック例会 6/14(水) 13:30 ～

1. 演劇『毘』名演 2023 年 5 月例会 俳優座劇場プロデュース 原作：ロベール・トマ 演出：松本祐子 出演：石母田史朗、加藤忍 市民会館ビレッジホール 5/18(木) 13:30 ～ (玉崎)

2. National Theatre Live『ライフ・オブ・パイ (Life of Pi)』作：ヤン・マーテル 演出：マックス・ウェブスター 5/26(金)～6/1(木) TOHO シネマズ赤池プライムツリー (伊藤 5/28)

3. MET Live Viewing『ばらの騎士』作曲：リヒャルト・シュトラウス 指揮：シモーネ・ヤング 演出：ロバート・カーセン 出演：リーゼ・ダーヴィドセン、サマンサ・ハンキー、エリン・モーリー ミッドランドスクエアシネマ 5/26(金)～6/1(木) (服部 5/26、塹江 6/1)

4. 演劇『エンジェルス・イン・アメリカ』作：トニー・クシュナー 翻訳：小田島創志 演出：上村聡史 出演：浅野雅博、岩永達也、鈴木 杏、那須佐代子 第一部『ミレニアム迫る』6/3(土) 11:45 ～、第二部『ペレストロイカ』6/3(土) 17:10 ～ 穂の国とよはし芸術劇場主ホール (伊藤、服部)

5. 映画『ディア・ピョンヤン』脚本・監督：ヤン・ヨンヒ シネマテーク (伊藤 6/6、服部 6/9)

6. 映画『ウーマン・トーキング 私たちの選択』監督・脚本：サラ・ポーリー 制作：フランシス・マクドーマンド 伏見ミリオン座 6/2(金)～ (服部 6/7)

7. 映画『リトル・マーメイド』ディズニー実写版 監督：ロブ・マーシャル 出演：ハリー・ベ일리 TOHO シネマズプライムツリー赤池 6/9(金)～ 玉崎 (6/13)

◆ 2023 年 7 月アートクリティック例会 7/26(水) 13:30 ～

1. オペラ『ラ・ボエーム』パレルモ・マッシモ劇場 作曲：ジャコモ・プッチーニ 指揮：フランチェスコ・イヴァン・チャンパ 演出：マリオ・ポンティージャ 出演：アンジェラ・ゲオルグー (Sop.) 愛知県芸術劇場大ホール 6/24(土) 17:00 ～ (酒井)

2. MET Live Viewing『チャンピオン』MET 初演、作曲：テレンス・ブランチャート 指揮：ヤニック・ネゼ＝セガン 演出：ジェイムズ・ロビンソン 振付：カミール・A・ブラウン ミッドラン

ドスクエアシネマ 6/16 (金)～6/22 (木)

(服部 6/19、塹江 6/22)

3. National Theatre Live『オセロー』演出：クリント・ダイアー 出演：ジャイルズ・テレラ
TOHO シネマズ赤池プライムツリー 6/23 (金)～6/29 (木) (伊藤 6/24、服部 6/25)

4. ドキュメンタリー『幾春かけて老いゆかん 歌人 馬場あき子の日々』監督：田代裕 出演：馬場あき子 語り：國村準 シネマスコレ (服部 6/26、伊藤 7/19)

5. MET Live Viewing『ドン・ジョヴァンニ』作曲：アマデウス・モーツァルト 指揮：ナタリー・シュトゥッツマン 演出：イヴォ・ヴァン・ホーヴェ 出演：ペーター・マッティ、フェデリカ・ロンバルディ ミッドランドスクエアシネマ 6/30 (金)～7/6 (木) (塹江 7/4)

6. MET Live Viewing『魔笛』作曲：アマデウス・モーツァルト 指揮：ナタリー・シュトゥッツマン 演出：サイモン・マクバーニー 出演：エリン・モーリー、ローレンス・ブラウンリー ミッドランドスクエアシネマ 7/14 (金)～7/20 (木) (伊藤 7/18、塹江 7/20)

7. オペラ『Roméo et Juliette』作曲：Charles Gounod 演出：Thomas Jolly 出演：Elsa Dreisig、Benjamin Bernheim Opéra Bastille、7/6 (木) 19:30～ (服部)

8. 演劇『昭和虞美人草』名演 2023 年 7 月例会 文学座 作：マキノノゾミ 演出：西川信廣 出演：早坂直家ほか ウィンクあいち大ホール 7/14 (金) 13:30～ (玉崎)

9. 音楽劇『ある馬の物語』原作：レフ・トルストイ 上演台本・演出：白井晃 出演：成河、別所哲也、小西遼生 兵庫県立芸術文化センター阪急中ホール 7/23 (日) 13:00～ (服部)

10. 映画『素足になって』ムニア・メドゥール監督 出演：リナ・クードリ ミッドランドスクエアシネマ 7/21 (金)～ (服部 7/22)

11. アニメーション映画『古の王子と3つの花』ミッシェル・オスロ監督 伏見ミリオン 7/21 (金)～ (服部 7/22)

◆ 2023 年 9 月アートクリティック例会 9/20 (水) 13:30～

1. 2023 年夏 ロンドン (& ストラットフォードーアボンーエイボン) 演劇事情

8 月 2 日 *As You Like It* (Royal Shakespeare Theatre)

7 日 *Midsummer Night's Dream* (Shakespeare's Globe Theatre)

8日 *Wicked* (Apollo Victoria Theatre)

10日 *Macbeth* (Shakespeare's Globe Theatre)

23日 *Macbeth* (Royal Shakespeare Theatre) (酒井)

2. オペラ『あしたの瞳』メニコンシアター Aoi こけら落とし公演 作曲・編曲・指揮：宮川彬良
7/21(金) 18:00～ (塹江)

3. 演劇『ブラウン管より愛をこめて—宇宙人と異邦人—』劇団チヨコレートケーキ公演 作：古川
健 演出：日澤雄介 メニコンシアター Aoi 7/29(土) 13:30～ (服部)

4. 演劇『オイディプス』パルテノン多摩リニューアルオープン1周年記念公演 作：ソポクレ
ス 演出：石丸さち子 出演：三浦涼介、大空ゆうひ 兵庫芸術文化センター中ホール 8/19
(土) 14:30～ (服部)

5. 演劇『エブリ・ブリリアント・シング～ありとあらゆるステキなこと～』作：ダンカン・マクミ
ラン、ジョニー・ドナヒュー 翻訳・演出：上田一豪 出演：佐藤隆太 穂の国とよはし芸術劇場
アートスペース 9/2(土) 14:30～ (服部)

6. 演劇『闇に咲く花』こまつ座創立40周年記念公演第2弾 作：井上ひさし 演出：栗山民也 出演：
山西惇、松下洸平 東海市芸術劇場大ホール 9/3(日) 12:00～ (服部)

7. National Theatre Live『ベスト・オブ・エネミーズ』作：ジェームズ・グレアム 演出：ジェレミー・
ヘリン 出演：デヴィッド・ヘアウッド、ザカリー・クイント TOHO プライムツリー赤池 9/8
(金)～9/14(木) (服部 9/9、伊藤 9/13)

8. 映画『エリザベート』脚本・監督：マリー・クロイツァー 出演：ヴィッキー・クリープス 伏
見ミリオン座 8/25～ (伊藤 8/28)

9. 演劇『桜の園』PARCO 劇場開場50周年記念シリーズ 作：アントン・チェーホフ 台本：サイモン・
スティーンズ 演出：ショーン・ホームズ 出演：原田美枝子、八嶋智人、成河、安藤玉恵 日
本特殊陶業市民会館ビレッジホール 9/13(水) 13:00～ (服部)

◆ 2023年10月アートクリティック例会 10/25(水) 13:30～

1. 演劇『アメリカの時計』作：アーサー・ミラー 演出：長塚圭史 出演：矢崎広、シルビア・グ
ラブ、河内大和 KAAT 神奈川芸術劇場 9/16(土) 14:00～ (伊藤)

2. 映画『怪物』監督：是枝裕和 脚本：坂元裕二 音楽：坂本龍一 出演：安藤サクラ、永山瑛太
ミッドランドスクエアシネマ 6/2 (金)～ (塹江 8/13)
3. 能『小牧山薪能』観世流・能「葵上」、和泉流・狂言「清水」、観世流・半能「船弁慶」、小牧山
史跡公園 9/16 (土) 18:00 ～ (塹江)
4. 演劇『愛の賛歌ーピアフ』名演 2023 年 9 月例会 構成・演出：加来栄治 出演：栗原小巻 ウ
ィンクあいち大ホール 9/21 (木) 14:00 ～ (玉崎)
5. 映画『ロスト・キング 500 年越しの運命』監督：スティーヴン・フリアーズ 出演：サリー・ホー
キンズ 伏見ミリオン座 9/22 (金)～ (服部 9/27)
6. 文楽協会創立 60 周年記念 人形浄瑠璃文楽『義経千本桜』昼の部 13:30 ～、『桂川連理柵』夜の
部 18:30 ～ 名古屋市芸術創造センター 10/6 (金) (玉崎・塹江 昼の部、塹江 夜の部)
7. オペラ『カルメン』名古屋二期会定期オペラ公演 作曲：ジョルジュ・ビゼー 指揮：佐藤正浩
演出：岩田達宗 振付：佐藤おりは 合唱指揮：近藤恵子 日本特殊陶業市民会館フォレストホー
ル 10/15 (日) 14:00 ～ (玉崎)
8. National Theatre Live『善き人』作：C・P・テイラー 演出：ドミニク・クック 出演：デヴィッ
ド・テナント プライムツリー赤池 10/20 (金)～10/26 (木) (伊藤・服部 10/22)
9. 映画『シアター・キャンプ』監督・脚本・制作：ニック・リバーマン 伏見ミリオン座 10/6 (金)～
(服部 10/12)

◆ 2023 年 11 月アートクリティック例会 11/22 (水) 13:30 ～

1. 演劇『ロスメルスホルム』作：ヘンリック・イブセン 脚色：ダンカン・マクミラン 演出：栗
山民也 出演：森田剛、三浦透子 穂の国とよはし芸術劇場主ホール 10/29 (日) 13:00 ～ (服部)
2. オペラ『トスカ』第 41 回 名古屋クラシックフェスティバル ボローニャ歌劇場 作曲：ジャコモ・
プッチーニ 指揮：オクサーナ・リーコフ 出演：マリア・グレギーナ (Sop.) マルセロ・アルバ
レス 愛知県芸術劇場大ホール 11/8 (水) 18:30 ～ (酒井)
3. 演劇『フットボールの時間』ala Collection シリーズ vol. 14 作：豊嶋了子と丸校演劇部 脚色・
演出：瀬戸山美咲 出演：堺小春、井上向日葵 四日市市文化会館第 2 ホール 11/11 (土) 14:00 ～

(服部)

4. 映画『私がやりました』監督・脚本:フランソワ・オゾン 出演:ナディア・テレスキウィッツ、レベッカ・マルベール、イザベル・ユベール 伏見ミリオン座 11/3 (金) (服部 11/3)

◆ 2023 年 12 月アートクリティック例会 12/13 (水) 13:30 ~

1. 演奏会『音とつながるコンサート ~ああ、おもしろいクラの音~ 秋のクラリネット』愛知県立大学教授ブルックス・信雄・トーン (クラリネット)、姫野真紀 (ピアノ) 日進市民会館大ホール 10/28 (土) 14:00 ~ (玉崎)
2. 演奏会『ワートルー音楽祭』神田望美 (フルート)、ラファエル・オブリ (ヴィオラ)、アレキサンダー・ドミトリエフ (チェロ)、ダニエル・ルービンシュタイン (ヴァイオリン・チェロ)、ジャン・クロード・ワンデン エインデン (ピアノ) 長久手文化の家森のホール 10/29 (日) 14:00 ~ (玉崎)
3. 演劇『わが友、第五福竜丸』燐光群創立 40 周年記念公演第 2 弾 作・演出:坂手洋二 愛知県芸術劇場小ホール 11/30 (木) 14:00 ~ (服部)
4. 演劇『外地の三人姉妹』原作:アントン・チェーホフ『三人姉妹』 翻案・脚本:ソン・ギウン 演出:多田淳之介 神奈川芸術劇場 KAAT 12/4 (月) 14:00 ~ (伊藤、服部)
5. MET Live Viewing『デッドマン・ウォーキング』作曲:ジェイク・ヘギー 指揮:ヤニック・ネゼ＝セガン 演出:イヴォ・ヴァン・ホーヴェ 出演:ジョイス・ディドナート ミッドランドスクエアシネマ 12/8 (金)~ 12/14 (木) (服部 12/11)
6. 演劇『モモンバのくくり罫』iaku 公演 作・演出:横山拓也 ABC ホール 12/9 (土) 13:00 ~ (服部)
7. オペラ『アルチャーナ』愛知県立芸術大学オペラ 2023 作曲:ヘンデル 指揮:糸原裕介 演出:飯塚励生 長久手文化の家森のホール 12/10 (日) 14:00 ~ (玉崎)

II. 短評

- (1) 英国ナショナルシアター・ライブ上映『レオポルトシュタット』（トム・ストッパード作、パトリック・マーバー演出）赤池 TOHO シネマズ 1/10 (火)

『レオポルトシュタット』は、2020年コロナ禍直前のロンドンで初演され、同年ローレンス・オリヴィエ作品賞を受賞したストッパードの最新作で、今回私が見たのは2022年ロンドンで上演されたもののライブ上映である（昨年東京の新国立劇場でも、広田敦郎訳、小川絵梨子演出で翻訳上演された）。

劇のタイトル『レオポルトシュタット』は、19世紀半ば過ぎフランツ・ヨーゼフ一世がユダヤ人に対する差別や制限を撤廃して以来、東欧各地から逃れてウィーンに移住したユダヤ人たちの過密な居住区のことである。

ウィーンを舞台に世紀末から第二次大戦後にかけて、激動の歴史に翻弄されたあるユダヤ人一族の流転のさまが、驚くべき完成度の高い群像劇として描かれていた。

この劇は壮大なフィクションであると同時に、ストッパード自身のルーツ探求の物語でもある。彼はチェコのユダヤ人家庭に生まれ、幼いときドイツ軍の侵攻で一家はシンガポールに転勤し、そこで父を亡くした。母がインドで再婚して、相手の故国イギリスに移住し、英国人として成長。母が過去に触れるのを嫌ったため、五十歳になって初めて自分のユダヤ人としての出自を知った経歴が、劇に登場するナイーブなレオという英國人に投影されている。

この劇の最大の特徴は、シンプルに凝縮された構成と、緻密に組み立てられたリアルなセリフに大きな歴史を感じさせる脚本の見事さであろう。物語のほとんどはメルツ家の居間で繰り広げられる。原作は年代に沿った五幕の構成であるが、初演時は二幕になり、コロナ禍を経た昨年の再演時には、休憩のない一幕ものになっていた。上演時間も約二時間に圧縮されていた。舞台が暗転する中、ゆっくり時代が移って人物が入れ替わり、幼児が大人になっているのだ。

オープニングは1899年、ウィーンの裕福なユダヤ人実業家・メルツ家の居間、姻戚関係にある三大家族・三世代が賑やかにクリスマス祝っているシーンで始まる。当時ウィーンはヨーゼフ皇帝によってユダヤ人の自由が保障されて以来、高い教育を受け成功したユダヤ人たちがウィーンの文化、芸術、学問の中心にいた。一族の強い絆が、メルツ家の居間で交わされる知的な会話から伝わってくる。

次の場面（1900年）では、メルツの妻がドイツ将校の居室で密会している。メルツは将校に決闘を迫るが、ユダヤ人は相手にしないと侮辱される。舞台は再びメルツ家の居間に変わり、ユダヤの大切な「過ぎ越しの祭り」を祝っている。

時は飛んで1924年、メルツ家の居間。孫たちは成人してその子供たちも生まれている。経済危機と左翼思想の高まる中、一族の中には社会改革を志す若者や、第一次大戦の負傷者や戦死者もいる。赤ん坊の割礼式の日なので、家中大騒ぎである。

空襲の爆撃音が響く中、舞台は1938年（ナチスドイツがオーストリアを併合した「水晶の夜」の年）に移る。鉤十字の腕章をつけて名乗りもしないオーストリア市民がいきなり侵入。自分を「ヘル・ド

クトル」「転居担当官」と呼ぶよう命じて全員を点呼し、翌日退去せよと命じる。平凡な市民が率先してユダヤ人を恫喝する様子がいかにもリアルで、恐ろしかった。

暗転して時が移り、第二次大戦とホロコーストを経た 1955 年。空き家になったメルツ家の昔の居間で一族の生存者三人が集うラストシーンである。ニューヨークから来た精神科医の叔母・ローザ、オーストリアに戻っている数学者の甥・ナートン、そのいとこで英国から来た若い作家・レオ。ユダヤ人の自覚に乏しいレオが、英国に移住した自分は幸運だったと語って二人を呆れさせるが、自分の手の傷の由来をナートンに教えられて、過去の出来事を思い出す。ローザが自分で書いた家系図をレオに見せる。一族が幸せだった頃のシーンがフラッシュバックのように舞台に再現されて消える。死者たちの名前が次々と読み上げられ、それぞれの末路が語られて劇が終わる。「ハンナーアウシュビッツ」「ヘルマン―自殺」「エルンストアウシュビッツ」「グレートルー病死」。暗転する舞台で淡々と読み上げる声だけが響き渡る。

この劇は群像劇であるが、劇のメッセージを担うのは三組の夫婦である。一族の中心にいる実業家ヘルマン・メルツは、カトリックの妻グレートルと結婚してカトリックに改宗し、ウイーン社会の成功者となっている。ヘルマンは義理の弟エルンストに、ドイツ将校に頼んで妻を妊娠させてもらった事、息子が生き延びて自分の会社を継げるよう、生まれた子がアーリア人だという証明書を手に入れた事を打ち明ける。だが妻が病死した後、彼は自殺してしまい、第一次大戦で不具となった息子も第二次大戦後自殺してしまう。ユダヤ人の誇りを捨てて、オーストリアに同化し、ビジネスのためにナチに屈服したヘルマン夫妻の姿はユダヤ人の悲劇的運命を象徴している。

ヘルマンの義理の妹ヴィルマはプロテスタントの医者・エルンストと結婚。エルンストはユダヤ教の妻の一族と親密な関係を築き、ユダヤ人としてアウシュビッツで死ぬのだ。彼らの娘ローザとその甥ナートンは生き延びて終幕を締めくくる。ユダヤ教の一族に、異教徒のグレートルやヘルマンやエルンストが、受け入れられていたことも伝わってくる。

ヘルマンの妹と数学者の夫は、ナチに踏み込まれた時、娘ネリー（レオの母親）に幼い息子と共にウイーンを離れるよう勧める。

それではストッパードの自伝的要素は、どのように作品に投影されているかをみよう。

1938 年ナチの手先となったオーストリア市民が突然メルツ家に押し入った時、幼いレオは恐怖のあまり握りしめた茶碗の破片で怪我して、医者的大叔父に縫ってもらう。その印象的なシーンは、17 年後の終幕へと繋がっていく。

1955 年ローザとナートンとレオが会う場面で、レオの手に傷跡があるのをナートンが見つける。昔この居間で過ごした束の間の記憶が蘇って、レオにもようやく変化がおこる。ユダヤ人としてのアイデンティティを初めて自覚したこの重要なシーンは、ストッパード自身の経験に基づいてはいるが、実は全くのフィクションだったのだ。

彼が自分の人生を語った文章^(註)にその経緯が書かれている。六十代になって初めて故国を訪れた時、医者だったストッパードの父に昔手の傷を縫ってもらった知人に会い、傷跡を見せられる。ストッパードがそれに触った時、何も記憶のない亡父の痕跡を初めて実感して、悲しみに襲われたと述べて

いる。人を過去へと繋げる手掛かりとして、「手の傷跡」が印象的で具体的なイメージとなって、劇の中で重要な役割を果たしているのだ。

二十代にして『ハムレット』の取るに足らない脇役二人を主役にして書き直した戯曲『ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ』で世界を驚かせて以来、常に演劇界の第一線を走り続けてきた当代随一の劇作家彼の筆力は、八十五歳になった今も少しも衰えていないことを証明する舞台だった。歴史的背景や一族の人間関係やエピソードなど、膨大な情報とメッセージがこめられて、圧倒されるばかりの完成度だった。55年にわたる架空の一族の歴史が、約二時間の物語に圧縮され、登場人物は実在した人々のように記憶に残る。ストッパードらしい知的で緊密な劇構造、シンプルだが含蓄にとみ、時にユーモラスなセリフのやり取りは、最後まで観客を引きつけずにはおかない。

この劇は、初めて真正面から自分の出自と向かい合ったストッパードの、ルーツ探求の物語であり、タイトルには自分の父祖たちを追悼する心情が感じられる。時空を自在に行き来する技法は影を潜め、至極真っ当で端正な劇であった。

ホロコーストやユダヤ人の悲劇を高みから声高に語るのではなく、家族の一人一人が懸命に生きた物語を歴史の暗部から掘り上げ、かくも見事に死者たちを蘇らせることができたのは、彼の劇作家としての並外れた力量によるものであろう。二つの大戦にまたがる歴史を背景に、ある架空のユダヤ人家族を群像として描き切って、深い余韻と感動を残す。

注：ストッパードは、英国での初演時、パンフレットの記事で『英国人になるまで』を書いて生い立ちに触れている。

(伊藤 記)

(2) 歌劇『田舎騎士道』(カヴァレリア・ルスティカーナ)と『道化師』(マスカーニ作曲、上田久美子演出) 愛知県芸術劇場大ホール 3/5(日)

マスカーニ作曲『カヴァレリア・ルスティカーナ』(田舎騎士道)と『道化師』を、久しぶりの県芸大ホールで観た。ともに予想を上回るユニークな上演であった。2015年にアメリカ・メトロポリタン・オペラのライブ上映で観た同じ演目は正統派だったが、今回の上演は従来の概念を打ち破るような、実に斬新な演出だった。

今回のオペラ上演は、文化庁の助成を得て2009年から始まった「全国共同制作オペラ」というプロジェクトの最新版だったのである(今回のこの作品は東京と愛知で公演)。特筆すべきは、今回の演出を任されたのが上田久美子という戯曲家兼演出家で、宝塚歌劇団で大活躍して昨年フリーランスになったばかりの若手のホープだったことである。

まず『カヴァレリア・ルスティカーナ』のストーリーを紹介しよう。物語はシンプルである。恋人のトウリッドウを探して、彼の母親ルチアの居酒屋にやってきたのは、小作人の娘サントウツア。トウリッドウは、自分の兵役中に金持ちの馬車屋と結婚した元恋人ローラとよりを戻している。つれ

ない恋人に絶望したサントウツアは、ローラの夫に妻の不倫を暴露。激怒したローラの夫とトゥリッドウは騎士気取りで決闘し、トゥリッドウは殺されてしまう。原作は、イタリアでは有名なジョヴァンニ・ヴェルガの短編集にある、たった十二ページの物語である。

そもそもこのオペラは、貧しい庶民のドラマをリアルに描くと言う点で、イタリア・オペラの中でも「ヴェリズモ」(真実主義・リアリズム)という新しい流れの作品として有名だが、今回はさらに大胆な翻案が行われ、十九世紀イタリアの話が現代の大阪(岸和田?)になっていたのには驚いた。原作は復活祭で賑わうシチリアの小さな村の物語だが、今回の舞台は(だんじり?)祭りで湧く現代の大阪になっていたのだから。

上田は初めから従来の歌劇の豪華な舞台や、現代人には退屈に思えるゆっくりした時間の流れとは異なる演出を狙っていたとパンフで語っている。現代人にもアピールする、リアルなドラマを作ろうとしていたことは、簡素な舞台装置や衣装からも窺える。

舞台の構造はかなりシンプルで、設備の整った大劇場でなくても上演できるように工夫されている。左右に外部を遮断するような大きな壁があり、中央には可動式の大きな壁が二つ、その壁にさまざまな背景や景色が映り、歌詞やセリフも出る。壁がくると裏返しになると、別の場面が現れる仕組みだ。壁と壁の間の隙間が、登場人物の出入り口になっている。舞台前方の右端と左端には、路上生活者が開幕前から寝転んでいて、貧困の象徴のようである。

『田舎騎士道』は、名曲がいくつも歌われるドラマティックなヴェリズモ・オペラであるが、今回の上演で一番驚いたのは、歌手とダンサー、二人でひとつの役を演じたことである。トゥリッドウを演じたイタリア人歌手(テノール)は歌うことに専念し、アクションは(日本人の)男性ダンサーが担当していた。この劇のダンスはコンテンポラリー・ダンスのような自由な振り付けで、特にラブシーンや決闘場面ではアクロバットの激しい動きもあり、目が離せなかった。

観ていて思い出したのが、静岡芸術劇場(SPAC)の芸術監督の宮城聡の演劇手法である。(語る人) speaker と(動作する人) mover に分かれて一人の人物を演じる劇団の仲間だったのが今回の演出家・上田だったのだ。伝統芸能・文楽における語る人と人形の「二人一役」のスタイルに近い。

歌劇にこのスタイルを持ち込んだアイデアはとても刺激的であった。振り付けの専門家による独創的なダンスによって、歌手の感情や行動を一流のダンサーが表現するのは、革新的な試みだったと思うし、ドラマティックな効果を挙げていたと思う。歌手はただ歌うことに集中すれば良いのだ。

しかし従来のオペラ歌手たちが、全エネルギーをかけて歌いながら、懸命に演技も工夫してきた事を思うと、少し複雑な気もした。時に歌手とダンサーが「一人の人物」を演じていることを実感できない場面があったし、独立したダンス表現が見事であればあるほど、歌手との一体感が薄れて、歌に対する観客の集中力が妨げられる場合があると感じたのは私だけだったろうか。

イタリア人歌手たちと日本人歌手が混じってイタリア語で歌い、指揮者は欧州で活躍するイスラエル生まれのアッシャー・フィッシュ、オーケストラは地元の中部フィルハーモニー交響楽団、そして合唱は愛知県芸術劇場合唱団であった。合唱団は左右の二階席にいて、イタリア語で歌っていた。

印象的な歌がいくつかある。まずサントウツアが恋人の母に恋を告白するアリア「ママも知ると

おり」を歌い、妻の不倫を知って夫が激怒する場面のあとに有名な間奏曲が聞こえてくる。そして死を覚悟したトゥリッドウが母に、恋人サントウツアの事を頼むアリア「お母さん、あのお酒は強いね」を歌うのだ。

ダンサーたちが目まぐるしく踊る舞台は現代の大阪である。イタリア語の歌詞はどう扱われているのだろうか。ここで字幕や言語の問題に言及せねばなるまい。まず舞台の上方の壁には、歌われるイタリア語に即した日本語字幕がつき、その下に英語字幕もついている。一方ダンサーたちが表現するアクションは、演出家が現代の大阪に置き換えた世界なので、逐語訳ではない大阪弁の字幕が（河内弁か？）すぐ近くの壁に時折映し出される。つまり三種類の言語の字幕が舞台の三箇所掲げられるのである。

賑やかな昼間の祭りは、劇には出てこない。舞台では、夕刻に人々が集まってきて、夥しい数の大きな白い提灯を竿に高く吊してゆく。祭の夜、提灯のあかりが美しく煌めく中、舞台では三角関係の悲劇が起こるのである。

演出家がこのオペラの舞台の時代と場所を、イタリアでなく現代の大阪にしたのは何故だろうか。貧しい庶民の生活をリアルに描くのが「ヴェリズモ」オペラであるが、現代の岸和田と思われる場所を選び、だんじり祭りという特別な時を選んだのは、オペラの演出を初めて手がけた上田の大胆な挑戦のようにも思われる。騎士気取りで決闘する血の気の多いイタリア男たちのイメージは、祭りで荒ぶる岸和田の男たちと見事に重なる。いかにも日本的で泥臭い祝祭の場を舞台にして、気鋭の演出家は日本の庶民の生活感覚に訴えかけるオペラを作ろうとしたのではないだろうか。

『カヴァレリア・ルスティカーナ』とセットで上演されることが多い『道化師』という歌劇も、今回上演された。この作品も底辺に生きる人々を主人公にした「ヴェリズモ・オペラ」である。幕が開いた時、路上に寝そべっていた役者二人が舞台中央で、文楽さながら二人で大きな人形を操って展開を暗示する。

二つの劇の主役を歌うのは、テノールのアントネッロ・パロンビ、大変美声で声量があるイタリア人歌手であった。イタリア人歌手に混じって、若い日本人歌手たちの体格も声量もテクニックも、見劣りがしなくなってきた。

気鋭の演出家による刺激的な歌劇であった。日本の伝統芸能のスタイルを取り入れた大胆な手法に感心したし、多彩な分野の才能ある人材を束ねて緻密な舞台を作り上げた力量も相当なものである。歌手、ダンサー、振り付け家、舞台スタッフなど、粒ぞろいの若いキャストとスタッフにも明るい未来を感じた。また、実力者揃いのダンサーたちに地元出身者が多く、今回この地方のダンスの人材が豊富な事を実感した。

助成を受けての制作プロジェクトなので、チケット代も安く、パンフも無料でありがたかった。

（伊藤 記）

(3) 演劇『エンジェルズ・イン・アメリカ』（新国立劇場、トニー・クシュナー脚本、上村聡史演出）
穂の国とよはし芸術劇場 PLAT 主ホール 6/3 (出)

第一部「ミレニアム迫る」と第二部「ペレストロイカ」、合わせて約8時間（休憩あり）という大作『エンジェルズ・イン・アメリカ』を観た。

この劇はアメリカで1991年～92年に初演され、ブロードウェイを経て全世界で上演・放映されて各賞を総なめにした。日本でも1994年初演された後再演を経て、今年東京の新国立劇場での上演となったのである。東京の後は「とよはし芸術劇場」と「兵庫県立芸術文化センター」のみの上演だった。

アメリカ現代演劇の古典とも言うべきこの劇の原作者トニー・クシュナーは、1956年ニューヨークのユダヤ人家系に生まれ、この作品で一挙にブレイクした。戯曲の他、翻訳・翻案・映画脚本など広く活躍している。今回の上演は小田島創志・新訳によるもので、小川絵梨子・芸術監督、上村聡史・演出の意欲作だった。

第一部の副題が「ミレニアム迫る」となっているのは、1980年代後半は「強いアメリカ」という神話にも陰りが見えて、世紀末の不安が色濃くなり、キリスト教の千年期（ミレニアム）の終末思想が漂っていたから。第二部の副題が「ペレストロイカ」となっているのは、ロシアが「ペレストロイカ」（改革）を唱えて一時的に明るい兆しが見えてきた時代に明るい希望を託したのだろう。

80年代の強いアメリカを目指すレーガン大統領時代、保守勢力が強くなって国民の貧富の差が増大し、社会の矛盾が露わになってきた。HIVウイルスによるエイズ（免疫不全症候群）感染が大きな社会不安をもたらし、同性愛者が抑圧され^(注一)、不穏な「終末思想」が漂う85年のニューヨークが舞台である。

物語はゲイの恋人たちの葛藤から始まる。裁判所のワープロ係として働く青年ルイスは、同棲しているユダヤ人の恋人プライアーからエイズ感染を告白され、怖くなって逃げ出してしまう。裁判所書記官のジョー（実はゲイのモルモン教徒）は、薬物依存で情緒不安定の妻ハーバーと暮らしている。ジョーは尊敬する大物弁護士ロイ・コーン（実在した人物で実はゲイ）から司法省への栄転を持ちかけられるが、妻が心配で返事を保留。ハーバーは夫がゲイであると幻覚の中で告げられる。恋人を捨てた孤独なルイスは、職場でジョーと親しくなっていく。

一方、ルイスに捨てられたプライアーの元に天使が現れ、「預言者になれ」と告げる。ジョーからゲイだと告白された母ハンナ（モルモン教徒）は、ニューヨークに出てきて、幻覚症状が進む嫁のハーバーをモルモン・ビジターセンターに招く。ルイスとジョーの関係にも変化が起き、ルイスはプライアーのもとに戻り、ハーバーは夫がゲイである事を知って去っていく。

ロイ・コーン^(注二)も医者からエイズと診断されるが、同性愛者を排斥する保守派の大物として、死ぬまで病名を隠し通す。入院した彼は、元ドラッグ・クイーン^(注三)の黒人看護師ベリーズの世話を受ける。彼が死刑にしたエセル・ローゼンバーグの亡霊が瀕死の枕元に現れる。

生きようとする強い意思をもったプライアーは、天使たちを斥けて死の淵から蘇る。終幕、セントラルパークのベセスダの噴水（天使の彫刻）を背に、ルイスとプライアー、看護師ベリーズとジョー

の母ハンナが、新しい社会への希望を確認する。

この劇はリアリズムが基本だった当時の演劇には珍しく、実験的な手法に満ちている。舞台上で複数のシーンが同時に進行する。例えば、ルイスが同僚のジョーとデートする場面の奥では、エイズを発症したロイ・コーンがベッドに横たわり、上手ではジョーの妻ハーパーが、幻覚の中で南極に旅立つ場面が、遠近法的に舞台に出現するという具合である。

この劇のもう一つの大きな特徴は、キャストを八人に限定している事である。端役も含め三十人以上の役を八人で演じなければならないと、作者クシュナーが脚本で指定しているのだ。

特筆すべきは、芸術監督・小川と演出家・上村が、すべての配役を（今回で五回目だという）フル・オーディション方式で選んだ事である。その結果才能ある多様な人材が起用され、自ら志願した出演者の熱意が伝わったし、見事なチームワークだった。役者たちは時間と空間を自由に行き来し、男女のジェンダーも超えて生者、死者、天使をも演じ分けるのだ。一つ一つのエピソードが極めてスピーディに、無駄のないセリフやアクションで表現されていた。ハーパー役の鈴木杏、ハンナ役的那須佐代子が光っていたし、プライアー役の岩永達也も熱演だった。ロイ・コーン役のベテラン山西惇は大変うまいのだが、アクの強さに欠けていたような気がした。

エイズに苦しむプライアーのベッドに降臨した天使は、「世紀末にキリストが再来するのを待って、それまでは人間が歩みを止めなければならない」と主張する破壊の神の使いである。天使は、（脚本の指示どおり）空中からワイヤーで吊り下げられるのだ。天使たちはさほど超現実的な存在には見えなかったし、死者の霊が喋り出し、現実と幻想や夢が入り混じって現れるこの劇の独創性が今ひとつ感じられなかった。内田洋一の「クシュナーの作劇が持つ超現実的な奔放さが後退するのは惜しい」（日経新聞4月29日）というコメントに共感した。

この劇における「宗教や信仰」も見逃せないテーマである。プライアーとロイ・コーンは、血や伝統や家族を重んじるユダヤ教徒なので、エイズ発症はこの世の終わりを意味した。モルモン教徒のジョーとハーパー夫妻、母ハンナも血縁を大事にするだけに、同性愛はもっとも忌むべきものだった。宗教が希望をもたらすのではなく、人を抑圧し葛藤をもたらすことが、この劇にはリアルに描かれている。しかしハンナは息子がゲイだと知ると、息子夫婦を助けにニューヨークに出てきて、見知らぬプライアーにまで付き添う。

ユーモラスな場面もある。ハーパーが薬物依存の幻覚の中で、空想上の旅行業者に誘われて南極に行き、エスキモーと出会うシーンや、母ハンナが嫁を連れて行くモルモン・ビジター・センターのジオリマ・シーンもおかしい。

マイノリティへの共感と希望が熱く語られるこの劇は、今日観てもクシュナーの力強いメッセージを感じることができる。彼自身が（カミングアウトした）マイノリティのゲイだったからこそ、このスケールの大きな群像劇が書けたのではないかと思う。コロナ禍や災害や戦争の只中にある今の我々も、似たような問題（愛、偏見、抑圧、格差、恐怖）に直面している。エイズ・パンデミックは、コロナ・パンデミックに繋がるのだ。

劇中、ゲイでユダヤ系のルイスが、「白人男性の異性愛者が牛耳るアメリカ政治」を批判しているし、

ハーバーの幻覚や悪夢には、自然や地球の環境破壊への恐怖が感じられ、現代に通じるテーマを提起している。

演出家・上村は、「LGBTQ への偏見に満ちた差別発言がまだ相次いでおり、同性婚がまだ不可能な日本で、2023 年にこの劇を上演する意味を考え続けたい」と上演パンフで述べている。

終幕、生還したプライアーをいたわる恋人ルイス、看護師ベリーズとハンナがセントラル・パークに集うシーンは、印象的である。ここには家族ではない絆—友情や愛情で結ばれた人間同士が新しい関係を築き、未来に向かって踏み出していく情景が描かれている。無償の愛や友情で新しいコミュニティーを作るという、今後の社会における人間関係の理想像であろう。

生きのびることができたプライアーは、「ゲイを先頭にマイノリティが市民権を得て、認知される社会を目指す」と、社会改革への意欲を語るのである。

このスケールの大きい劇の副題が「国家的テーマに関するゲイ・ファンタジア」であることに深く納得したのであった。

注一＝キリスト教・原理主義者の多い共和党や保守派が強くなると、「同性愛」は神を否定するものとして忌み嫌われる。

注二＝大物弁護士ロイ・コーンはローゼンバーグ事件で名をあげ、マッカーシズム（赤狩り）で辣腕を振るった。

マッカーシー失脚後も、マフィアやドナルド・トランプの有能な相談役として、弁護士活動を続けた。

注三＝ドラッグとは、衣装の裾を引きずる（drag）ことで、ドラッグ・クイーンとは、女装パフォーマーのことである。

（伊藤 記）

(4) 演劇『ペリクリーズ』（演劇集団円公演 シェイクスピア作 安西徹雄翻訳、中屋敷法仁演出） 両国・シアター X 3/3 (金)

コンパクトな両国・シアター X において「演劇集団円」によるシェイクスピアのロマンス劇『ペリクリーズ』を中屋敷法仁の演出で観た。語りと見せかけに満ちた物語にダンスやマイムを取り入れた公演は、ミュージカルの様で楽しかったが、終幕の父娘の再認の場面は静かな感動を誘った。

劇の冒頭、青白く薄暗い光の下、青い衣装を身にまとい青白い死人顔の化粧を施した役者たちが後ろ向きでゆっくりと動き始めた。一定のリズムで体を左右に揺らす動きは『ペリクリーズ』を取り囲み運命を支配する海の表象であろう。舞台脇から語り手が静かに現れ「ジョン・ガワー」と名乗って「教訓の多い古き良き物語を語るために墓から蘇ってきた」と語り始める。彼はこの劇の材源の一つとされる教訓詩『恋人の告白』（1393）の作者である。舞台上で繰り上げられるペリクリーズの冒険譚はガワーの登場する劇に埋め込まれた劇中劇の趣向であり、役者たちの死人メイクは彼らもまた蘇ってきたことを示している。

ガワーは各幕の初めと途中に適宜登場し、あらすじを語り観客に想像力を働かせることを要請する。「言葉はもはや不要です」として黙劇を見せることもあれば演技のウソを暴きもする。ガワーは物語に対する「裁き（判断）は観客の皆様委ねます。」と慇懃無礼に語るが、劇中劇という二重の虚構

の中では役者たちが何をどう演じて、真偽の判定は難しい。劇作家の自信のほどが窺える。中屋敷はその意向を読み取り、海の底から蘇った人々の演じる荒唐無稽な物語に仕立て上げた。

舞踏家中村蓉が担当したステージと身体表現にも演出家の意図が浸透していた。小野寺修二の下でも仕事をした彼女は、青い木の椅子と大きな木のテーブル3つを移動させて、船上、神殿、宮殿などに見立てさせた。役者たちは巻物、スカーフ、帽子、上着、手袋、小刀などの衣装と小道具を取り替えて場と役を素早く変えた。変身や場面転換に付随する役者たちのマイムや群舞はよく訓練されており、ガワの語りと連動して、各エピソードを素早く継ぎ目なく繋いだ。

冒険の始まりはツロの領主ペリクリーズのアンタイオカス王の娘への求婚である。彼は、「我は母にして妻、かつまたその人の子、6人にしてただ2人」という神話的な謎を解かねば結婚できない。ガワが王と姫の近親相姦を語り始めると、姫は不自然に手足を振り回した。謎解きに失敗した人の首が多く並べられていることに語りと言及すると、役者たちは首を前に突き出した後に、一斉に横に傾けた。ペリクリーズは謎解きの答えを明言せず逃げ帰る。彼の諸国遍歴をガワは「よき君主の物語」と言うが、そうは見えない。表裏のある言葉と誤魔化しのきかない身体や、台詞と演技の関係性に観客の意識を向ける仕掛けが随所に見られた。

ペリクリーズは、嵐の夜妻サイーサが出産後に死んだと思い、水夫たちに請われて不本意ながら水葬する。彼女は浜に流れ着き、医師のセリモン邸に運ばれた後、派手なマジックショーを擬した場面で仮死状態から蘇生した。蘇生は神の秘儀に拠るものではない。ショーは、セリモンが医術で人間に本来備わっている生きる力を引き出したにすぎないことを楽しく示していた。

ガワは14年の時の流れを可能にし、サイーサのその後と、海で生まれたマリーナが養い親ダイオナイザの妬みを買うまでに美しく成長したことを語る。この時舞台上に、語りで言及されるだけのダイオナイザの娘が登場し、マリーナが刺繍した花は本物と見まがうほど美しく、歌う声は小鳥のさえずりのようだという説明をマイムで表した。お話の中の人物が生身の身体を得て、面白おかしく言葉をなぞった。自然と人工の対比はよく示されるモチーフだが、ここでは自然に属する身体表現が言語表現に敵わず、伝える内容にズレと限界があった。

マリーナは海賊にさらわれて女郎に身をやつす。女郎宿のやり手の女将は「振りをする」ことこそ男心を掴む秘訣であると彼女に教え込む。しかし彼女は、女将の意に反して、彼女目当ての男たちを表裏のない言葉で説教し、次々に改心させた。客たちが変心／変身について「夢でも見ているみたい」と語るとき、観客はそれを奇跡とは信じなくても虚構の中の出来事として受け入れるだろう。一方ガワは、マリーナの死を偽装して嘆くダイオナイザや、墓碑銘の前で悲嘆にくれるペリクリーズらの様子を黙劇で見せる。「偽りの見せかけはいかに人の心を欺くことか」は、ダイオナイザに対する偽装批判のようだが、実は外見を変えて人を騙す役者の演技に対する批判なのだ。役者たちはわざとらしい演技をしていたのである。

娘の死に心閉ざすペリクリーズと死んだはずの娘マリーナの再会場面において、二人は、海上の船に見立てたテーブル上に離れて座わり、対話を重ねた。娘は体の内部からほてりを感じ始めたと言い、父王は当初拒絶した娘の身の上話を所望し、「お前の言うことを信じる」と言うようになる。身体を

震わせて語った娘の言葉は、父の物語を書き換えた。父娘の抱擁が自然な振る舞いに見え、予想以上に感動的であった。劇中で積み重ねられてきたウソやわざとらしい演技は消え、表裏のない物言いがリアリティを生み出したのであろう。

ペリクリーズがダイアナに命じられるまま神殿前で自分の物語を語ると、聞いていた王妃は失神した。一同は慌てたが、仮死の繰り返しは喜劇であった。再会の場面で妻は夫の腕の中に迎え入れられた。身振りと自然な物言いが重なり、彼らは終幕後現実を生き始めるように見えた。

「演劇集団円」は、「劇団雲」から独立した翌 1975 年に『ペリクリーズ』を故・安西徹雄訳で本邦初演している。アフター・トークに拠れば、再演に際し劇団内で台本を探したところ、初演時ペリクリーズ役に抜擢され今回ガワー役を務めた藤田宗久の手元に唯一ガリ版刷が残されていたという。今回の安西訳の蘇演は、ガワーが蘇らせた『ペリクリーズ』のエピソードと重なり、感慨深い。安西は『ジュリアス・シーザー』の上演台本（1989）を改稿した古典新訳文庫『ジュリアス・シーザー』（光文社）において、台本提供および翻訳について次のように述べている。

私のもっとも重視するのは、むしろリズムということ—より具体的にいうなら、どれだけ役者の息遣いに深く働きかけられるか、そしてまた、役者の身体の内側にどれだけ鋭い反応を呼び起こすことができるか、セリフが想像力を喚起するその圧力のエッジを、どれだけ先鋭にできるかという点である。（227 頁）

演出の中屋敷は、再認の場面で、修練を積んだ役者たちの身体を通して真実の言葉を響かせ、安西の精神を蘇らせたと言えよう。彼は「劇団柿食う客」の「女体シェイクスピアシリーズ」において、シェイクスピア作品の深い読みから斬新で切れ味鋭い作品世界を提示した。今回の舞台も十分楽しめたが、伝統劇団に対する遠慮があったのかもしれない。もう少し羽目を外した所があってもよかったと思う。

（服部 記）

(5) オペラ 『Roméo et Juliette（ロメオとジュリエット）』（Charles Gounod 作曲、Thomas Jolly 演出）Opéra Bastille 7/6 (木)

オペラ・バスティーユにおいて今シーズンの掉尾を飾るオペラ『Roméo et Juliette（ロメオとジュリエット）』（シャルル・グノー作曲、ジュール・バルビエ／ミシェル・キャレ台本）をカルロ・リッツィの指揮で観た。この作品は、庶民的なリリック座（現在パリ市立劇場）において、1867 年パリ万博の最中に初演され、成功を収めた。古典作品を当時の趣味に合わせて書き換えた甘美な悲劇オペラは、パリ・オペラ座（ガルニエ宮）では 1985 年以降上演されていない。21 世紀の新オペラ座でどのように演じられるのか興味津々で出かけた。

作品の展開はシェイクスピアの原作戯曲から多くを踏襲している。ヴェローナのモンタギュー家の息子ロメオは仇敵キャピュレット家の舞踏会でその娘ジュリエットと出会って情熱的な恋に落ち、ロ

ラン神父立ち合いの下で密かに結婚する。しかし、街頭での乱闘で友人が刺し殺されたことに逆上したロメオは、ジュリエットの従兄を殺してしまい、町から追放されることになる。二人で一夜を過ごした後、彼は別離を悲しみながら去る。父にパリスとの結婚を申し渡されたジュリエットは、それを避けるため神父から薬を貰って飲み、仮死状態となって墓地に安置される。ロメオは情報の行き違いから、ジュリエットの死の真相を知らぬまま墓に行き、そこに横たわる新妻を見て服毒する。目覚めたジュリエットも短剣で死に赴く。

オペラ版では 19 世紀末の恋愛オペラの常套として、細かなエピソードを排し、再会と死に関する場面が最大の見せ場となっている。花嫁のジュリエットは新郎パリスとの婚礼の場で倒れる。墓地で彼女が仮死から目覚めたとき、原作では既にロメオは息絶えているが、オペラでは意識がまだはっきりしている。再会を果たし喜んだ後、ジュリエットは真相を知り嘆き悲しむ。毒が体に回って意識が遠のく中、ロメオは天上を夢見ながら、ジュリエットと掛け合いで歌い続ける。終幕前の恋人たちのドラマティックな歌唱はメロドラマでは必須である。しかし以前このオペラを観たとき、最終場面が冗長だと感じた。

パリ・オペラは、上演にあたりタイトルロールに若くて人気ある歌手を、演出家に 2024 年パリオリンピック開会式のディレクターを務めるトマス・ジョリーを起用し、ポピュラーな作品の、フランスオペラとしての魅力をアピールしようとしたのだろう。ジョリーはシェイクスピアの『ヘンリー六世』(2010 - 2015) や『リチャード三世』(2015) の演出で高評価を得ている。彼は作品を読み直した際、シェイクスピア作品に共通する「オクシモロン (撞着語法)」に気づき、それを、今演出のドラマトゥルギーの中心に置くことにしたと説明している。(公演ブックレット 39 頁)。彼はガルニエ宮の大階段の模型セットをバステュー (新オペラ座) の回り舞台上に置いた。そして新旧を融合させた新しい作品世界の創造を目指したのだ。蠟燭の灯された大階段がバステューの舞台上で回転すると、明暗が瞬時に入れ代わり危うい雰囲気的舞台空間が出来上がった。生と死が背中合わせとなった恋人たちのはかない運命を表しているようであった。

一幕キャピュレット家の舞踏会シーンにおけるアリア「私は夢に生きたい」は、ロメオに出会う以前のジュリエットが、パリスとの結婚を勧められたときに歌う。「そんなことを言わないで、まだ夢の中にいさせて」と、ジュリエットはワルツのリズムに合わせて軽やかに舞台空間を動き回るはずだった。しかし歌い始めたとき、若々しく良く響く声がどこから飛んでくるか一瞬分らず、目を凝らしてその姿を探さねばならなかった。明暗の差が著しい舞台上で多くのダンサーがゾンビのように踊り回り、ジュリエットの動きを妨げているようであった。このダンスは公演パンフレットに拠れば、1970 年代にアメリカ西海岸の LGBTQ の間に一時広まって途絶えその後復活したワッキング (Waacking) という名のダンスである。振付担当のジョセファ・マドキはフランスにおける第一人者だそうだが、このダンスは、ジュリエットに早晚訪れる死を暗示する死の舞踏に思われた。

婚礼の夜ロメオは上半身裸でベッド上でジュリエットと熱い抱擁を交わし、愛の二重唱を歌った。彼らは本当の恋人同士のように見えた。筆者の隣席のフランス人らしき女性は 10 歳位の少年を連れていたが、何かを囁いた後、少年の目を掌で覆ってしまった。母親は「名作」オペラで熱いラブシー

ンが演じられるとは思っていなかったのだろう。

パリスとの婚礼の場ではジュリエットは祭壇へ登っていく大階段の途中で倒れ、数段転がり落ちた。両家の乱闘シーンではズボン役の小姓ステファノが派手で切れのいい立ち回りを見せて喝采を浴びた。歌手たちの身を挺した演技は驚くほどリアルだった。演出家はこのオペラを甘いだけのメロドラマではなく、現代的な嗜好にあった刺激的な演劇作品に仕立てることを試みたのであろう。

筆者が観た日のロメオ役はバンジャマン・ベルナイム (Tn.)、ジュリエット役はエルザ・ドライジグ (Sop.) であった。どちらも世界の歌劇場で歌っている旬のフランス人歌手である。彼らは若いにもかかわらず力で押して歌うのではなく、細部にわたってコントロールされた声で熱い思いを歌い上げ、死の直前のデュエットも飽きさせなかった。ジュリエットの父親役は日本の新国立劇場にも登場したローラン・ナウリ (Br.) で、安定した深い声を響かせた。彼は強引なだけの父親には見えず、好感が持てて逆に悲しみを誘った。上演で印象的だったのは、オキシモロンのドラマトゥルギーでもワッキングのダンスでもなく、歌手たちの素晴らしい歌唱と演技だった。

バカンス直前の劇場は、正装した伝統的なスタイルのカップルから、T シャツにハーフパンツのラフなスタイルの旅行者らしき人たち、子供連れまで多種多様な人々が集い、開放的な雰囲気だった。2024 年夏のオリンピック開催にむけてパリ市内は大改修中であった。かつてパリ万博開催中にオペラ『ロメオとジュリエット』が多くの観客を世界中から集めたように、パリ・オペラはオリンピック開催の前年に現代の嗜好に合わせたフランスオペラの上演をめざし、観客の増員を図りたいと考えたのだろう。しかしそうであるならば、英語の字幕表示をどの席であっても見やすいようにするなど、もう工夫する必要があるだろう。

(服部 記)

(6) 演劇『ブラウン管より愛をこめて—宇宙人と異邦人—』(劇団チョコレートケーキ 古川健作、日澤雄介演出) メミコンシアター Aoi 7/29 (土)

「劇団チョコレートケーキ」の『ブラウン管より愛をこめて—宇宙人と異邦人—』をオープンして間もないメミコンシアター Aoi で観た。最新の音響・照明設備の備わった客席数 301 の劇場は、劇場が次々に閉鎖されていく現在の名古屋市内で、待望の規模の劇場といえるだろう。史実のなかにフィクションを織り込んで展開する密なドラマを、小空間で観ることができたのは幸いだった。

ストーリーをまず紹介したい。特撮ヒーローものを制作する会社の社長は企画会議でとにかく低予算の番組制作を要求する。そこに呼ばれて来たのは制作監督松村の大学時代の後輩で、トレンドー・ドラマの脚本担当を最近下ろされたばかりの脚本家井川である。彼は会社のカンヅメになって差し入れを食べながら、逡巡する。手っ取り早く安く仕上げるためには、過去の作品を焼き直すことにすればよい。都合よく、特撮ものでありながら特撮のない放送回があった。突然町に現れた異星人を市民が不安から排除しようと暴動を引き起こすが、異星人が暴動に巻き込まれたパン屋の女主人を助け、正義の味方ワンダーマンには活躍の場がない展開である。

井川は制作スタッフや出演者たちとともに、自分たちの差別体験と、関東大震災時の朝鮮人虐殺事件や被差別部落などを例に挙げて、話し合いを重ね制作に取り組む。この現場の様子とテレビで放映されるドラマが舞台上で継ぎ目なく交互に演じられた。劇中ドラマでは町の人々が差別感情剥き出しの暴徒と化す様子や、彼に理解を示した優しいパン屋の女主人が夕陽の照らす中で死んでいく感傷的な場面が演じられる。異星人はその最期をワンダーマンと共に看取った後、地球人理解のための旅に出ることを告げて去っていく。常日頃テレビ局の意向を気にして作りたいものが作れないことに悩んできたスタッフや、社会問題に関心がなかった若い俳優が興味を示し始め、制作現場は熱を帯びてくる。完成間際、内容を知ったテレビ局担当者が変更を迫り、松村は井川の「青臭さ」を窘め、プロットの書き換えを指示する。しかし「先輩はいつから権力の顔を窺うようになったのだ」という井川の迫力に負け、「言いたいこと」を入れて制作・放送し、会社を辞めることになる。後日テレビ局担当者は何事もなかったように、名を隠せば仕事を回すと関西弁で言う。彼らは大人の対応をしているのだ。数日後松村は電話で井川に「お前、俺が男と住んでいることを知っていたのかい？」と尋ねる。彼が曖昧にうなずいたところで暗転し幕となる。

特撮ヒーロー番組は20世紀後半の米ソ冷戦時に生まれた。異星人とヒーローの対決は悪と正義の代理戦争である。もっともどちらの側も自分たちこそ正義と思っていたのだが、バブル期に対立構造が緩むと原初の意味は失せ、悪を懲らしめる正義のヒーローという型が残り、費用をかけずに視聴率が稼げる子供向けの安易な番組となった。ヒーロー番組の枠組みを借りて、舞台では、差別においては無理解や無意識が一番問題であるという気づきが展開されていく。「自分は差別していないと思っている人が実は差別している」「メッセージを伝えるだけでは差別はなくなる」という劇中の言説はそのまま現代社会の現実を言い当てており、熱いメッセージとして伝わってきた。

「劇団チョコレートケーキ」は、事実と論理を積み重ね、これまで舞台を通して社会に対して「言いたいこと」を発信してきた。メディアの違いはあるにせよ、井川は劇団の座付き作家古川と重なり、劇団の日頃の姿勢が劇中の制作スタッフの自然な演技を導き出していたように思われた。ドラマ部分は相互理解から希望への道筋を示した芝居となり、制作スタッフの自然な遣り取りとは明らかにトーンが異なっていた。俳優たちが緻密に演じ分けることで、芝居の中のドラマはファンタジーとなって、押しつけがましさを説教臭さを感じさせなかった。

終幕直前の松村が自身の私生活について井川に問いかけた台詞は唐突であったが、逆に劇作家古川の周到な意図を感じずにはいられなかった。劇中間部には、松村は私生活を全く語らないという伏線が置かれていた。性的マイノリティである村松の井川に対する問いかけは、実は私たち向けられていたのだ。

2023年6月いわゆる“LGBTQ理解増進法”が成立し、理解を広めようとする動きが多方面でとりあげられたが、その法律は差別を助長しかねないとの批判もある。タイトル『ブラウン管より愛をこめて』は昭和の時代の矛盾だらけのテレビ業界にあって「発信」を試みたドラマ製作者たちの熱い思いと様々な愛の形を表しているだろう。しかし発信するだけでは差別はなくなる。観客は芝居の終わりで、理解することと共感すること、他人の立場に立って考えることのキューを与えられる。

それは「自らを発見し、異なる身体や考えを持った他者へ、思いを馳せる場」を掲げるこの劇場のコンセプトと重なる。当初テレビの番組制作の舞台裏を描いた作品として気楽に見ていたが、最後に差別の根っこにある無関心と無理解と事なかれ主義に向き合うように仕向けられたのである。

(服部 記)

(7) 演劇『エブリ・ブリリアント・シング〜ありとあらゆるステキなこと』(ダンカン・マクミラン／ジョニー・ドナヒュー作、上田一豪翻訳・演出) 穂の国とよはし芸術劇場アートスペース 9/2 (出)

『エブリ・ブリリアント・シング〜ありとあらゆるステキなこと』を豊橋芸術劇場で観た。劇作家ダンカン・マクミランが出演俳優のジョニー・ドナヒューと共に創り上げた一人芝居で、2013年エジンバラ・フェスティバルのフリンジで評判になっている。日本ではコロナ禍直前の2020年俳優の佐藤隆太によって東京芸術劇場で初演された。しかし再演では訳と演出が初演時の谷賢一から上田一豪に交代した。おそらく谷のセクハラ提訴問題が原因と考えられる。2023年日本では映画・舞台芸術分野の多方面で性暴力・人権侵害が明るみになり、大きな問題となった。ハラスメント防止対策や、性的シーン制作の環境作りをサポートするスタッフであるインティマシー・コーディネーターの設置などに関しても、日本は遅れている。制作の東京芸術劇場は、スタッフの交代でハラスメント防止に対する意志と姿勢を示したと言える。

上演はアートスペースで行われた。中央に赤い絨毯と一脚の椅子が置かれ、その周りを客席が取り囲んでいた。会場に入ると既に佐藤がいて、客に話かけていた。客は250人ほどだろうか。開演15分前になると参加協力の説明とお願いがあり、それに同意した観客に番号とセリフの書かれたカードが手渡され始めた。手持ちカードの番号が告げられるとそこに記されたステキなこと(もの)を読み上げる仕組みである。上演中照明は落ちず、アートスペース全体が明るい舞台空間となった。客席とステージの境界を取り除いた観客参加型演劇、所謂イマーシブ・シアター形式である。カード配布に手間取って開演は10分ほど遅れた。カードを見て緊張気味の観客はいたが、遅れを気にしているようには見えなかったし、会場のアナウンスもなかったと思う。佐藤は客の配置とアクションをする上での空間の使い方や段取りを何度も確認しているように見えた。客たちはその様子を目で追いながらお行儀よく待っていた。舞台全体が明るく佐藤の動きがよく見えるので既に開演しているようだった。観客は既に劇世界内に取り込まれ、一種の協同意識(共犯意識)を持つに至っていたのかもしれない。しかしプロの上演としては時間通りに始めてもらいたかった。

物語は、7歳のときの“ボク”の回想から始まる。“ボク”は生きるのが辛くなったママを元気づけるためにステキことを1番からノートに書き始め、それをママに見せることにした。「夜更かししてテレビを見ること」「水鉄砲遊びをすること」「美味しいオレンジ」など他愛もないことを考え、書きつけることは、彼にとっても救いだったのだろう。それは人生を肯定的に捉えることなのだ。しかしママは自死してしまう。父親との気まずい関係、性と死に対する不安や葛藤、将来を悲観して悩み苦しむ青年期から、大学入学後の彼女との出会いと結婚、別居した妻の病と死別に至るまでの辛く悲

しいことの多いエピソードが、観客の身体を通した様々なステキなことに縁取られ、主に中央絨毯上で演じられた。エピソードの途中で登場するカウンセラー、父親、獣医、大学教授、恋人などの役は進行中に観客に突然割り振られた。彼らは他の客が見守る中、戸惑いながらも求めに応じて即興で演技した。恋人役は赤いワンピースを着た女性だった。彼女は当初恥ずかしそうだったが、次第に恋人のセリフを受け止め投げキスを返すまでになった。カウンセラーのアドバイスや結婚式の父親挨拶などのハードルの高い要求に関しては、観客は固唾を吞んで舞台を見守ったのではあるまいか。佐藤は“ボク”と舞台監督の立場を演じ分け、相手のどんな言葉でも演技でも当意即妙に肯定的に対応していた。自身の内面から生まれた悲しみを乗り越えるためのアイデアは、いったん他者によって語られることで客観性と推進力を獲得した。深刻な物語がアドリブとハプニング盛り沢山のエンターテインメントとなったが、それでよいのだろうかとも思った。

最後に客席の照明が落ち、“ボク”がぼつねんとレコードをかけて回想を始めると、雰囲気が変わった。観客は演劇世界への没入という疑似体験を通して、他者の悲しみに触れ、身の回りの些細な事柄が癒しになり生きる力を引き出すとの気づきを与えられた。しかしそのためには、共感を示してくれる他者の存在が必要なのだろう。

(服部 記)

Ⅲ. 2023 年春・夏ロンドン（&ストラットフォード・アポン・エイヴォン）演劇事情

猖獗を極め、ロンドンの演劇界にも多大な影響を与えたコロナはどうやら峠を越え、多くの観客が劇場へ戻ってきた。昨年の West End の観客数は、コロナ前の 2019 年比 7.21% 増の 1642 万 68 人であった。今年の 1 月の Heathrow 空港利用者数は 540 万に達し、コロナ発生以来、最高を記録した。今年の劇場来場者数も大きく伸びることになるだろう。ただ、コロナ感染者は、重症化はしないものの、増加していて、医療専門家はマスクの着用を推奨していたが、街中でも、混んだ交通機関の中でもほとんどの人がマスクを掛けなくなった。そのせいではないのだろうが、今年に入ってから、Piccadilly Theatre や Almeida Theatre などいくつかの劇場では、関係者の中に体調不良者が出たために、公演の一時中止を余儀なくされたが、夏を迎えるころには、コロナのために公演が中止になることはほぼなくなった。

コロナ発生以来、2 年間ロンドンへ足を運ばずに「ロンドン演劇事情」を執筆してきたが、まだコロナへの不安が払拭できないままに、昨年の 10 月に次いで、今年は 3 月と 8 月の 2 回、現地で観劇することができた。10 月にはまだまだコロナ感染への不安は大きかったが、幸い何事もなく滞在を終えることができた。それで安心したわけではないのだが、3 月の滞在中に同行の妻がコロナに感染してしまった。幸い筆者は感染しなかったが、濃厚接触者ということで、宿から出ることができず、予約していたいくつかの観劇をキャンセルせざるを得なくなった。もうここ何年かの傾向ではあるが、ロンドンは今年も相変わらずミュージカルの上演に圧倒されている。2 週間おきに発行されている *Official London Theatre Guide* (31 July–13 August) を見ると、上演劇場の数はコメディ／エンターテインメント 7、ドラマ 14 に対してミュージカルは 30 である。*The Times* 紙に演劇の上演予定が掲載されなくなって久しい。人々はネットで検索し、ネットで切符を購入する。そして劇場へ入るときは紙の切符ではなく、切符が保存されたスマホをかざす。銀行の窓口や Cash Dispenser は減り、ロンドンだけでなくイギリス中の Cashless 化はますます進んでいる。そのような中での今年 2 度にわたるロンドンでの観劇を報告する前に、昨年 11 月に発表されたイギリス政府からの演劇への助成金について述べておきたい。

コロナで経済的に大打撃を受けた演劇界は政府が支給する助成金に多大の関心を寄せていた。10 月 26 日発表の予定が延期され、関係者はやきもきしたが、11 月 4 日に「イングランドにおける文化・芸術分野の助成金の支給先及び配分」が発表された。今回は 2023 年 4 月から 2026 年 3 月までの 3 年間の支給案である。Arts Council England (ACE) が支給先と配分を決定し、発表した。ACE は政府の Department for Digital, Culture, Media, and Sport 省が管轄する政府外公共機関である。助成金は政府からの交付金と国営宝くじの収益金が充てられる。政府は次の 2 点を今回の交付の基本方針とした。まず、ロンドンに拠点を置くすべての文化・演劇組織に対する助成金を 2023 年から 2026 年の 3 年間で 7000 万ポンド以上減額すること。さらに、2022 年 4 月から 2025 年 3 月に 4350 万ポンド追加支給するが、そのすべてをロンドン以外の地域の活動と組織の支援に使うこと。つまり助成金

の減額と、地方への分権化が方針の骨子である。これを受けて ACE は、地域格差是正のため、ロンドンに拠点を置く組織に対する助成金を減らし、これまで十分な助成金を得ていなかった地域に回すこと、ロンドンに拠点を置くすべての組織に拠点を地方に移す検討を要請すること、これまで十分な助成金を得ていない地域（Levelling-Up-for-Culture Places）として 109 の地域を指定することを決定した。2023 年から 2026 年までの助成金総額は 1 年あたり 4 億 4600 万ポンドで、演劇関係の組織に 1 億 1190 万ポンド（内ダンス関係の組織に 4691 万ポンド）支給されるが、ロンドンに拠点を置く組織に支給される額は約 3 分の 1 で、前回の 39.5% から比率を下げた。助成金を受ける権利を認められた組織を National Portfolio Organization（NPO）というが、NPO として認められた組織の数は 950（内、演劇関連の組織は 196）である。141 の組織が NPO の資格を失った。

ACE の決定を具体的に見ていこう。助成金が増額となった演劇関連組織には English Touring Opera（年間 35 万 5079 ポンド増）、Eclipse Theatre Company（30 万 9382 ポンド増）、Open Theatre Company（30 万ポンド増）など 212 団体。現状維持の組織は Royal Shakespeare Company（年間 1525 万 9706 ポンド）、Chichester Festival Theatre（177 万 2234 ポンド）など 427 団体。減額となった組織は Royal Opera House（年間 294 万 2602 ポンド減）、Southbank Centre（186 万 9782 ポンド減）、National Theatre（85 万 364 ポンド減）など 51 団体。NPO の立場を失い助成金を打ち切られた組織は English National Opera、Donmar Warehouse、Hampstead Theatre、Gate Theatre、Cheek by Jowl など 141 団体である。English National Opera は Trafalgar の London Coliseum から Manchester への移転が噂されている。これまで優れた成果を上げてきたいくつかの劇場・劇団が助成金の交付を受けられず苦境に陥ることになる。

3 月にはロンドンで以下の 5 公演を観た。

3 月 14 日 *Romeo and Julie*（National Theatre Dorfman Theatre）

3 月 16 日 *Allegiance*（Charing Cross Theatre）

3 月 17 日 *The Winter's Tale*（Shakespeare's Globe Theatre & Sam Wanamaker Playhouse）

3 月 18 日 *Sylvia*（Old Vic Theatre）

3 月 23 日 *Hamlet*（National Theatre Dorfman Theatre）

Romeo and Julie は National Theatre と Cardiff にある Sherman Theatre との共同制作で、National Theatre での公演が終了した後、4 月には Sherman Theatre で上演される予定である。Gary Owen による新作劇だが、*Romeo and Julie* という題名と、「Shakespeare の *Romeo and Juliet* に影響を受けて生まれた作品」という宣伝文句に誘われて、早速切符を入手した。Shakespeare とはほとんど関係のない、現代における若者の恋愛劇であった。Wales 訛りの英語で語られるうえに、俗語が頻繁に使われていて、理解に苦労した。Romeo は 18 歳の若者で、付き合っていた恋人と別れた後も、二人の間に生まれた赤ん坊を育てている。Romeo の母親はアル中で、孫の面倒を見ようとしめない。Romeo は赤ん坊を養子に出すことも考えるが、この子が本当の親に抱

かれるのはこれが最後だと思うと養子に出すこともできず、自分の手で育てる決心をする。育児で夜も眠れず疲れ果てた Romeo は子供を乳母車に乗せて公園に行き、そこで居眠りをしてしまう。そこへ Julie が現れる。図書館で勉強しようとしたが、うるさくて勉強もできず、出てきた。Romeo の隣に空席を見つけて、そこで勉強を始める。Julie は優秀な高校生で、Cambridge 大学に進学し、物理学を学ぼうとしている。Stephen Hawking の弟子になることを夢見ている。Julie の母親は彼女が2歳の時亡くなっていて、母親の記憶がほとんどない。父親は再婚するが、胸を病んでいる。ここまででも Shakespeare とは全く設定が異なることがわかる。自分には母親となる意識が全くないと思っている Julie は、Romeo の手が荒れているのはおしめの洗濯のためであり、Romeo が子供を育てているのは「この子が自分を必要としているからだ」と知らされて、少しずつ Romeo に接近していく。付き合っていくうちに、Julie にとって Romeo は「自分の好きなことを、自分が考え、感じていることを、なんでも話せる相手であり、それをきちんと聞いてくれる人」となる。やがて Julie は妊娠する。子供を産むか、大学へ進学するか、周りの大人たちを巻き込みながら、二人は選択に悩むが、Julie は、「必ず帰ってくるから」と言いながら、進学を選ぶ。大学へ去っていく Julie に向かって、Romeo は「行くがいい。そして君は輝く人となれ、我々みなのために」と祝福する。登場人物は5人、舞台装置もほとんどない小さな劇だが、現代に生きる若者の生態の一端を描いて見せてくれた。Romeo を演じた Callum Scott Howells と Julie を演じた Rosie Sheehy の熱演が印象的であった。

Allegiance は2012年9月、California 州 San Diego で初演されたミュージカルである。2015年から2016年にかけて Broadway で、2018年には Los Angeles で上演されている。日本でも『忠誠』というタイトルで、濱田めぐみ、海宝直人、上条恒彦らが出演して、2021年に東京、大阪、名古屋で上演された。このミュージカルに初演から出演している日系人の役者 George Takei（映画 Star Trek の Sulu Captain を演じたことで知られる）から第2次世界大戦中の日系人強制収容所での個人的な体験を聞いた Marc Acito、Jay Kuo、Lorenzo Thione の三人が脚本を書き、さらに Jay Kuo が作詞、作曲をした。劇が始まると、時は2001年秋、真珠湾攻撃記念式典の準備をしている日系退役軍人 Sam Kimura（George Takei が演じる）のもとに、60年近くも疎遠であった彼の姉 Kei の遺言執行人と名乗る若い女性がやってきて、Kei が亡くなったことを告げ、Kei から預かった封筒を手渡す。葬式が今日行われるので出席してほしいという。舞台は1941年に遡る。Sam の父親 Tatsuo と祖父 Kaito（Takei が一人二役で演じる）はカリフォルニア州サリナスで農場を営んでいた。12月の日本軍による真珠湾攻撃のあと、日系アメリカ人が天皇に忠誠を誓うのではないかと恐れたアメリカ政府は、西部の日系アメリカ人を Wyoming の Heart Mountain Relocation Center に収容する。Sam 一家も土地の売却を強制され、収容所に収監される。Sam は志願兵としてアメリカの軍役に就くことが収容者のアメリカに対する忠誠心を示すことになり、自由を勝ち取ることにつながると信じている。祖父 Kaito が病気になった時、Sam は収容所の看護婦であった Hannah に士官向けにしか使うことのできない薬を分けてもらう。Sam と Hannah は恋に落ちるが、異人種間の結婚は法律によって禁止されていた。自分の信念に従って、Sam は、日本軍に逆らう日系アメリカ人市民同盟のリー

ダー Masaoka に近づき、アメリカ軍への入隊許可を得る。一方、父親の Tatsuo は、アメリカに忠誠を尽くすかどうかを試す Royal Questionnaire で、アメリカへの忠誠を拒否し、牢屋に入れられる。姉の Kei は徴兵制反対運動のリーダー Frankie Suzuki と恋に落ちる。Sam は *Life* 誌とのインタビューで徴兵に反対する Frankie を非難する。Tatsuo はこの雑誌を渡され、この記事のおかげで、釈放されるのだが、Sam は一家の中で孤立していく。とうとう Sam はアメリカ軍に入隊し、イタリアの最前線に送り込まれる。徴兵制反対運動を続ける Frankie は投獄される。Sam の恋人 Hannah は Frankie を釈放するために Kei の力になると約束する。キャンプ内で Frankie と軍務官が組み合いの喧嘩をしたとき、中に割って入った Hannah は誤って放たれた銃弾に倒れる。その後釈放された Frankie と Kei は結婚する。原爆の投下によって勝利したアメリカ政府は、戦勝を祝って、収容所にいる日本人に 25 ドルと帰りのバスの切符を与えて、釈放した。Frankie と Kei の間に女の子が生まれ、Hannah に因んで、Hanako と名付けられた。戦地から大怪我を負って帰国した Sam に父親 Tatsuo は「Frankieこそ私が望んでいた息子だ」と言ってしまう。Hannah の死も Frankie と Kei が関わっていたこと知って怒った Sam は Masaoka の斡旋で Washington での仕事を得て立ち去ろうとする。Kei は「逃げていくなんて卑怯だ」と言って、Sam を止めようとするが、誤って、軍服につけた Purple Heart 勲章（軍務にあって負傷した兵が受ける）をもぎ取ってしまう。時は戻って 2001 年。Sam は姉から届いた封筒を開ける。中には父親の形見としてあの *Life* 誌が入っていた。その表紙には父親の手で “You’re my Hero” と書かれていた。もう一つ、Kei が Sam に渡したがっていたあの Purple Heart 勲章が入れられていた。Sam は遺言執行者が姪の Hanako であることに気づき、「生きている間に和解するチャンスがあったはず」と後悔し、泣き崩れる。Sam はその日執り行われる姉の葬式に出席する。

このミュージカルが上演された Charing Cross Theatre へは初めて行った。Charing Cross 駅の裏手にある小さな劇場である。劇場へ入ると長方形の空間が広がっていて、全体を二分するように、左手に階段状の観客席、右手には舞台となる土間が広がっている。観客はほぼ若者ばかりであった。第 2 次世界大戦中の日系アメリカ人の強制収容をめぐるこの家族の崩壊と和解の物語は、アメリカ国内で上演されたとき、観客の中で賛否が割れたという。12 万人の日系アメリカ人を強制収容したアメリカの政策は正しかったとする人々と誤っていたとする人々の立場を反映していた。今回初めてイギリスで上演されたわけだが、まずは強制収容が行われた歴史そのものを知らなかった観客が多いと思われた。第 2 次世界大戦の隠された歴史を知らせるだけでもこのミュージカルの上演の意味があったのかもしれない。しかも、見終わって、ハンカチで涙を拭う観客が何人もいた。ふと、この作品はミュージカルではなく、ストレートプレイでもよいのではないかという思いが脳裏をかすめた。というのも、歌を歌わない Takei の演技は重厚だったし、Sam を演じた Telly Leung や Kei を演じた Aynrand Ferrer の歌唱力は素晴らしかったが、見終わった後も、観客が口ずさめるような代表曲がなく、ミュージカルとしては少し物足りなかったからである。後述する *Sylvia* を観た後は、さらにその思いが強くなった。

Shakespeare's Globe Theatre ではこの劇場の Associate Artistic Director、Sean Holms 演出の *The Winter's Tale* を観た。Shakespeare's Globe は、3 月というこの時期ではまだ寒いので、屋外の Theatre は使用しないで、もっぱら屋内の Sam Wanamaker Playhouse を使う。*The Winter's Tale* を Sam Wanamaker Playhouse の閉ざされた空間で上演するとなると、Sicily の宮廷の場面はよいとしても、Bohemia の開放的で明るい、祝祭的な場面は作れないのではないかと思っていた。一体どのような舞台になるのかという関心をもって、座席に座った。一幕は Sicily の城の dining-room で、妻 Hermione と Bohemia 王との密通を疑う Leontes の胸中が、薄暗いキャンドルの明かりのもと、緊張感をもって演じられる。妻、息子の相次ぐ訃報が告げられる Leontes の深い絶望のうちに、一幕が終わり、休憩に入る。休憩に入ると観客は全員、屋外の Theatre へ移動するよう促される。やはり Bohemia の開放的な世界は屋内の狭い閉鎖的な空間では描けなかったのだ。Theatre に移動した観客は思い思いの座席に座り、舞台上ではなく、平土間で演じられる村人のフェスティバルを、寒さに震えながら見ることになる。平土間には長いテーブルが置かれているだけで、他に装置はない。Ed Gaughan 演じる Autorycus が、アドリブを交えながら、観客を楽しませようとするが、少しも盛り上がらない。第三幕で観客は再び Sam Wanamaker Playhouse の Sicily の世界へ移動する。後悔に打ちひしがれる Leontes に、死んだはずの Hermione が復活する最終場はいつ見ても心動かされるが、今回も例外ではない。しかし原作をかなり削ったために、人物像も十分に描かれたとはいえず、劇全体が小さく感じられた。Autorycus が重視されていて、例えば、二人の王の和解の場面や Perdita が実は Leontes の実の娘であることが分かった場面は、原作では 3 人の紳士が語るが、この演出では Autorycus に語らせていた。宮廷に入り込むことはできないはずの彼に語らせているのには違和感があった。Sicily と Bohemia の二つの異なった世界を表現するために屋内と屋外の二つの劇場を使った Shakespeare's Globe 初めての試みは、面白いとは思ったが、成功したとは言い難い。

Old Vic Theatre で女性参政権の実現に邁進した Pankhurst 家の母と娘たちをめぐるミュージカル *Sylvia* を観た。Old Vic と Sadler's Wells と ZooNation (Kate Prince 主宰の Dance Company) 三者の共同制作である。第一次世界大戦終結とイギリス政府が初めて女性の選挙権を認めた The Representation of the People Act 1918 の成立 100 周年に当たる 2018 年 9 月 8 日から 22 日まで Work in Progress として Old Vic で初演された。そして 2023 年 1 月 27 日から 4 月 8 日まで、その完全版が同じ Old Vic で上演された。脚本は Kate Prince と Priya Parmer、音楽は Josh Cohen と DJ Walde、演出は Kate Prince である。劇場は満席、このミュージカルの人気のほどがうかがえた。舞台奥の一段高いところでミュージシャンが演奏し、その前に幕があって、舞台上で演じられている場面の年代と場所とが映し出されて、観客の理解を助けている。

Allegiance が一家の崩壊と和解のミュージカルであったのに対し、*Sylvia* は一家の崩壊のミュージカルである。主人公は表題の Silvia Pankhurst と彼女の母 Emmeline、そして姉 Christabel。3 人ともイギリスの女性活動家として名高い。特に母親 Emmeline Pankhurst は 1999 年の *Time* 誌

で「20 世紀で最も重要な人物 100 人」の中に選出されている。舞台は 1913 年、Silvia が Women's Social and Political Union (WSPU) から除名されるところから始まり、遡って、娘二人の子供時代、亡き父 Richard の思い出、黎明期の WSPU、兄 Frank の死、Labour Party の創設者 Keir Hardie と Sylvia の恋愛などが、当時の政治状況に絡めて、次々に描かれていく。女性参政権をめぐる Churchill と彼の保守的な母親、逆に進歩的な妻とのやり取りも面白く描かれる。女性参政権運動に対する男性社会からの締め付けが厳しくなると、Emmeline と Christabel もそれに応じて過激な運動を展開する。それに対して平和主義者の Sylvia は投獄されたり、ハンガーストライキを繰り返したりして、次第に母と姉から離れていく。とりわけ母と姉が労働者階級の女性の参政権獲得に消極的だったために、Sylvia は WSPU に対する忠誠を拒み、この組織から追放されてしまう。その後 Sylvia は East London Federation of Suffragettes を立ち上げ、East End の労働者階級の女性を国会に送り込む運動を展開する。第一次世界大戦が勃発すると、かつての Sylvia の恋人であった労働党の国会議員 Keir Hardie は戦争に反対して議員を辞職するが、急に体調を崩す。Hardie の妻は夫が最後に Sylvia と会う機会を作ってくれる。Hardie は Sylvia を励ます。一方、Emmeline は戦争の支持を表明し、女性参政権運動も中断して、良心的戦争忌避者や戦争に反対する女性たちを非難するようになる。1918 年には Representation of the People Act 1918 によって、やっと、30 歳以上の女性に選挙権が与えられることになる。最終場、Sylvia はパートナーの Silvio Corio との間に生まれた子供を連れて母に会い、和解を試みるが、母から拒否される。女性が参政権を得た最初の国政選挙に Christabel が立候補し、母が Christabel の選挙応援をしていることを知る。しかも Christabel は保守党の候補として選挙に臨んでいた。

母と子の思想的対立も強烈であったし、歌も強烈、Dance Company を率いる Kate Prince の演出によるダンスも強烈。すべてに圧倒されるミュージカルであった。Sylvia 役の Sharon Rose の歌唱力も素晴らしかったが、Emmeline 役の Beverly Knight の歌唱力は他の追従を許さぬほどに聞く者の心を揺さぶる。このミュージカルの代表曲 March Women March はこれからも長く歌い継がれていくと思う。出演者がほとんど黒人であったために、ここで描かれたイギリスでの女性参政権獲得の運動のエネルギーが、そのままアメリカの黒人の公民権運動のエネルギーに重なって見えてしまって少し戸惑った。この優れたミュージカルがわずか 2 か月半で終わってしまったのは実に惜しい。再演が期待される。

再び National Theatre 中の Dorfman Theatre で子供向けの *Hamlet* を観た。宣伝に「8 歳から 12 歳にふさわしい」とあった。子供に Shakespeare をどのようにわからせるのかという関心から出かけてみた。Jude Christian 翻案とあるので、原作に自由に手を加えて、子供にもわかりやすい作品に書き換えたのであろう。上演時間は 1 時間 10 分。客席は教員に引率された子供たちでほぼ満席であった。重要と思われるセリフはそのまま語られるが、難しい表現は削除されている。政治的な要素もカットされていて、専ら宮廷内の家庭悲劇として描かれる。開演のベルが鳴ると、8 人の役者が三々五々舞台に登場し、客席の子供たちとハイタッチをして話しかける。二階席の観客にも手を振っ

て歓迎の意を示す。舞台は先王 Hamlet の葬儀から始まる。Hamlet が悲嘆に暮れながら父親の墓の前でたたずんでいる。Rosencrantz と Guildenstern 役の役者が他の登場人物の紹介をすると同時に物語の一部を語り始める。8 人とは、Hamlet、Claudius、Gertrude、Polonius、Laertes、Ophelia、Rosencrantz、Guildenstern である。Polonius 役の役者が先王 Hamlet の亡霊を一人二役で演じるが、ほかの役者が二役を演じることはない。原作の他の登場人物はすべてカットされている。この 8 人はいずれも舞台上で命を落とし、死ぬと役者はポケットから白い布を取り出して顔にかけ、退場する。面白かったのは劇中劇の場面である。Hamlet 役の役者が、劇中劇が始まる前に、客席の子供たちに向かって、これから悪者が眠っている国王の耳に毒薬を注ぐから、その場になったら、“Murderer！”と叫んでほしいと依頼する。Hamlet はゴンザーゴ殺しの場面で国王を殺害する叔父の役を Claudius にやらせて、現王 Claudius が先王 Hamlet を殺害したことを暗示する。毒薬が注がれるとき、子供たちは一斉に”Murderer！”と叫び、その大声が劇場中に響き渡った。最後の剣術の試合の場面でも、毒杯を用意したのが Claudius であることがわかると、子供たちは、今度は Hamlet からの要請がなくても、自発的に“Kill him！”と大声で叫んでいた。子供たちに“Kill him！”と叫ばせるような演出には賛否があるであろうが、Shakespeare を初めて見たであろう子供たちを劇の世界に巻き込むことには成功していたと思う。子供に Shakespeare を理解させるための様々な方策は参考になった。教育の現場でも Shakespeare 離れが進んでいるという。こうした試みはこれからも必要になるであろう。

今年 2 度目のイギリス訪問では以下の 5 公演を観た。

8 月 2 日 *As You Like It* (Royal Shakespeare Theatre Stratford-upon-Avon)

8 月 7 日 *Midsummer Night's Dream* (Shakespeare's Globe Theatre)

8 月 8 日 *Wicked* (Apollo Victoria Theatre)

8 月 10 日 *Macbeth* (Shakespeare's Globe Theatre)

8 月 23 日 *Macbeth* (Royal Shakespeare Theatre Stratford-upon-Avon)

2023 年の Royal Shakespeare Company (Stratford-upon-Avon) での Shakespeare 上演作品は、*The Tempest* (1/21~3/4)、*Julius Caesar* (3/18~4/8)、*Cymbeline* (4/22~5/27)、*As You Like It* (4/27 ~ 8/12)、*Macbeth* (8/19~10/14)、*The Merchant of Venice* (9/21~24/2/10) の 6 作品である。このうち *As You Like It* と *Macbeth* を観ることができた。コロナ前は Stratford-upon-Avon に 2 泊すると、例えば水曜日の夜と木曜日の昼と夜、あるいは金曜日の夜と土曜日の昼と夜といったように、Shakespeare の作品を 3 つ見ることができた。ところが、今年の日程からもわかるように、コロナ後は、例えば 1 週間滞在しても、1 作品しか見ることができないことがある。同時に複数の作品が上演されている期間が極端に短くなった。今回も 2 回に分けて Stratford-upon-Avon へ出かけなければならなかった。上記のように、この 3 年間は政府からの補助金が減額されないのだから、もう少し上演作品を増やすか、同時期に複数作品を長期間上演してもらいたいものだ。

2023年6月に劇団の Artistic Director が交代した。Artistic Director にはこれまで Peter Hall (1960～1968)、Trevor Nunn (1968～1986)、Terry Hands (1986～1991)、Adrian Noble (1991～2003)、Michael Boyd (2002～2012)、Gregory Doran (2012～2022) とイギリス演劇界を牽引してきた演出家たちが就任してきた。新しい Artistic Director に選任されたのは Daniel Evans (Artistic Director of the Chichester Festival Theatre) と Tamara Harvey (Artistic Director of the Theatre Clwyd in Wales) の二人である。次の10年間は二人体制で劇団を統率していくことになる。Harvey は劇団初の女性 Artistic Director である。Evans は Wales 出身、Harvey は Wales で活躍しているので、この二人の Co-Director が何か新しい風を、やや停滞しているかに見える RSC の活動に、吹き起こしてくれることを期待したい。前任者の Doran はパートナーの役者 Antony Sher の病気看護のため21年ごろからほぼ職から離れていたが、22年4月から23年6月までは Erica Wyman が Acting Artistic Director として劇団を率いていた。

Heathrow 空港に着くなり、レンタカーで Stratford-Upon-Avon へ向かい、*As You Like It* を観た。演出はフリーランスの演出家2012年から2019年まで Bush Theatre の Associate Director を務めていた Omar Elerian。RSC では初めての演出である。なんとも変わった演出であった。出演者は16人で、うち12人が70代（英語では Septuagenarian という）、4人が若者である。Rosalind を演じる Geraldine James は72歳で RSC 初出演。Orlando を演じる Malcolm Sinclair は72歳、Jaques の Oliver Cotton（当日は体調不良で Christopher Saul が代役）が79歳。82歳で Ian McKellen が Hamlet、72歳で Vanessa Redgrave が *Much Ado* の Beatrice を演じたことを考えると何も不可解なことはないのだが、それにしても高齢の出演者ばかりである。それもそのはず、45年前の1978年に上演したこの作品に出演した役者が集まってもう一度この劇を再演するという設定なのだ。中にはすでに亡くなっていて今回の企てに参加できない役者もいる。例えば Adam を演じた役者はすでに亡くなっていたので、Adam の出番になると、相手の役者がコートを丸めて Adam に見立て、慈しむように話しかけていた。舞台は劇場の楽屋。椅子が何脚も置かれていて、役者は椅子に座っていて、自分の出番になると立ち上がって演じる。再演を期した舞台リハーサルなのだ。4人の若者たちは、understudy と言った感じで、最初は台本を手にして、台本を見ながら、小さな役を演じる。高齢であるが故に、Orlando と Charles のレスリングの試合は、単なる指相撲に変えられる。高齢の Rosalind と Orlando のあいだで繰り広げられる恋のやり取りも、老いらくの恋のように見えてしまって、しっくりこない。ところが観ているうちに、これまで見てきた年相応の役者が演じる *As You Like It* にはなかった不思議な思いにとらわれてきた。今我々は舞台上で演じられている登場人物を見ているのではなくて、登場人物を演じる一人ひとりの高齢の役者たちを見ているのではないか、役者たちがたどってきた45年の来し方に我々の想像力を働かせているのではないか、役者たちが個々に抱えた時間をこの作品の中にもちこんだのではないかという思いである。Shakespeare の描く Arden の森は、宮廷を追われた公爵や宮廷人たちが、静かに暮らす、いわば、時間のない世界である。その世界に時間を抱え込んだ高齢の役者たちが時間をもちこんだのだ。Jaques が語る「人生の7つの段階」も Jaques を演じる年を重ねた役者が語ることでさらに深いものになる。高齢の役者を起用

した演出家の狙いもそこにあったのだと思う。最も印象的だったのは、役者たちが演技を終えると、舞台奥一面に Arden の森が映し出されたことだ。それぞれの人生を歩んできた役者たちがこの劇を演じることでやっと安息の場所、時間のない場所にたどり着いたかのようであった。Shakespeare 劇には観客に高齢者が多いのでこのような演出になったのか。もしそうだとしたら、若い観客はこの劇に違和感を感じるのではないかと思う。なんとも不思議な劇を観たような気がした。

ロンドンに戻って、Shakespeare's Globe Theatre で *Midsummer Night's Dream* を観た。2021 年に Pentabus Theatre の Artistic Director に就任し、現在は Shakespeare's Globe の Associate Artist でもある Elle While が演出している。彼女はこれまでこの劇場で *Merry Wives of Windsor*、*Hamlet*、*As You Like It* を演出した経験がある。本公演の注目点は、Puck 役にこの劇場の Artistic Director の Michelle Terry を起用していることだろう。2018 年の *Hamlet* 上演の時も Hamlet 役に Terry を起用したのは While であった。Terry 演じる Puck は、いかにも異界から地上にはい出てきたかのように、全身グリーンとゴールド混色の衣装を纏い、仮面を付けて顔を半分隠している。Puck は Oberon の命令を受けて行動するだけなのに、Oberon を演じるこの劇場の看板役者の一人 Jack Laskey の演技を圧倒して、この劇全体の Chaotic な雰囲気支配しているように見えた。役者としての Terry のすばらしさを再確認した。もう一つの注目点は、Hermia 役に achondroplasia (矮人症) の Francesca Mills を起用したことだ。Hermia への愛を語るとき、Lysander は膝まづいて語らなければならない。そうしないと二人の顔と顔の位置が大きくずれてしまうからだ。Mills は所狭しと舞台を飛びまわって懸命に演技していたが、どこかそぐわない気がした。なぜ Mills を起用したのか、その意図がわからなかった。2019 年の *As You Like IT* では聾啞の女優が登場し、彼女は手話でセリフを語ったが、彼女を起用したのも今回の演出の While であった。Shakespeare's Globe の先駆的な企ての一環なのだろうか。ここ数年 Shakespeare's Globe が提唱してきた「男優・女優 fifty-fifty」の原則はほぼ踏襲されていた。劇の練習をするために森に集まる村人たちは Peter Quince はじめ全員女優が演じた。ただし女優が男性の登場人物を演じていたのに対して、Nick Bottom だけは Nicola Bottom と名前を変え、女優が女性の登場人物を演じたことになっていた。となると、目を覚まして最初に見たものを恋してしまうという花の汁を目に注がれた Titania は口バに変身させられた同性の Bottom に恋をすることになる。二人の間の同性愛？これもまた先駆的な演出なのだろうか。これまで観てきた *Midsummer Night's Dream* では、いずれも、Theseus と Oberon、Hippolyta と Titania はそれぞれ同じ役者が一人二役で演じられていたが、この演出では Hippolyta と Titania は別の女優が演じていた。そうするには何か意図があるのだろうか。コロナ前には Shakespeare's Globe Theatre の舞台に立つ役者がずいぶん上手になったと思っていたのに、今回、急に質が落ちたのではないかと感じた。あれやこれや疑問や戸惑いを感じているうちに舞台は終わっていて、あまり楽しむことができなかった。

コロナ禍のロンドンを訪問できなかった期間も、航空券を予約したり、劇場の切符を予約したりし

ていた。結局はコロナが収まらず、予約をキャンセルしなければならない事態が何度も続いた。航空券は手数料を払ってキャンセルしたが、劇場の切符はキャンセルすると、Ticket Agent が、有効期限を設定したうえで、バウチャーを発行してくれた。そして使われていないバウチャーがどれほどあるかをメールで知らせてくれる。有効期限が切れてバウチャーを無駄にしたこともあったが、今回は有効期限切れ近くのバウチャーを使ってミュージカルの切符を手に入れた。Apollo Victoria Theatre の *Wicked* である。黒い帽子を被ったグリーン色の肌の魔女のポスターがロンドンのいたるところに貼ってあって、見るかどうか気になっていた作品である。よく知られているように、*The Wonderful Wizard of Oz* の成功を当て込んだ Gregory Maguire 原作の *The Wizard of Oz* 裏話とも言うべき小説に基づいたミュージカルである。2003 年に San Francisco で初演され、2006 年にイギリスでも上演された。今年で 17 年目に入るロングラン作品で、イギリスでのロングラン作品としては 9 位に位置する。Apollo Victoria Theatre だけで 6000 回以上の公演が行われ、観客数は 1100 万人に上る。作曲は Stephen Schwartz。第 1 幕の最後、*The Wicked Witch of the West* とのレットルを貼られた Elphaba が、自分のすべてをかけて *The Wizard of Oz* と戦うと絶唱する ‘Defying Gravity’ や、2 幕終盤、いったんは敵対した Elphaba と Glinda が再び友情を取り戻すときに歌う ‘For Good’ をはじめとして心に残る名曲が多い。Elphaba を演じる Alexia Khadim と Glinda を演じる Lucy St. Louis の歌唱力も素晴らしかった。舞台は Oz の国を治める *The Good Witch*、Glinda が、*The Wicked Witch of the West*、Elphaba が Dorothy に水を浴びせられて溶けて亡くなったことを国民に告げて始まり、そして最後、再び Glinda が舞台に立って、*The Good Witch* として Oz の国を再編すると宣言しているところを、死んだと思われていたが実は生きていた Elphaba が見守るところで終わる。それに挟まれて、二人の間の Shiz 大学時代の初対面の反発から友情の誕生、Elphaba と彼女の妹 Nessarose との軋轢、*The Wizard of Oz* の陰謀と正体、Flyero Tiggular への愛をめぐる Elphaba と Glinda の葛藤などかなり複雑なエピソードが歌われていく。原話 *The Wonderful Wizard of Oz* の物語を知らないと、このミュージカルの細部まで理解できないと思うのだが、観客席を埋めた若者たち、子供たちは夢中になって見入り、聞き入っていた。

再び Shakespeare’s Globe Theatre に出向き、*Macbeth* を観た。演出はフリーランスの演出家 Abigail Graham。彼女はこの劇場の Sam Wanamaker Playhouse で *The Merchant of Venice* を演出したことがある。意図がはっきりしないが舞台全体に灰色のカバーがかけられていて、それが取り除かれると、平土間の観客の中を歩いて 3 人の魔女が舞台に上る。最初この 3 人が魔女だとは思わなかった。というのは 3 人とも男優が演じ、身には真っ白な放射線防護服のような衣装を纏い、顔には鳥のようなマスクを被っていたからだ。セリフを聞けば、3 人が魔女（魔男というべきか？）であることがわかる。魔女を男優が演じるのを見るのは初めてである。Shakespeare 作品の「現代化」があちこち見て取れる。魔女の服装からしてそうだが、登場人物の服装はほぼ現代服で、宴席では男性役の役者はタキシードを着用している。現代服を纏った *Macbeth* は勇敢な武将には見えない。Macduff の息子は ‘Spiderman’ の衣装を着ている。服だけではない。*Macbeth* が魔女たちの

助言を受けに洞窟へ出向く場面で、原作では、いろいろな生き物の死骸を大釜に入れて煮ているが、本演出では、なんだか見当もつかないものに加えて人間の死体から肉をそぎ取ってミキサーに入れ、ジュースにしていた。攪拌の最中に電源が落ちてミキサーが動かなくなると、魔女の一人が、おそらくアドリブであろうが、「モダンテクノロジーめが！」と悪態をつく場面もあった。インタビューで Graham は「我々は役者たちと一緒に、本当に生きていると実感できる作品を、そして今日われわれがいるこの世界と対話できる作品を作りたい」と言っているが、観客に阿ってこのような「現代化」をせずとも、人間の野心を描いた Shakespeare のこの作品は十分に現代的足りうると思う。シェイクスピア研究者はシェイクスピアの実像に近づこうとし、シェイクスピア演出家はシェイクスピアを現代に生かそうとする。両者の接点を見出すことができればよいのだが、言うは易く行うは難い。本公演の最大の欠点は、Macbeth (Max Bennet が演じる) も Lady Macbeth (Matti Houghton が演じる) もおとなしくて、彼らの野心が観客に伝わらないことだろう。野心にあふれた Macbeth を、年末までには上演される予定の Ralph Finnes (Touring Theatre) と David Tennant (Donmar Warehouse) の Macbeth に期待する声があちらこちらから聞こえる。

今回の滞在の最後にもう一度 Stratford-upon-Avon へ行って RSC の *Macbeth* を観た。演出は Edinburgh の Lyceum Theatre の Associate Director を務める Wils Wilson。National Theatre of Scotland や London の National Theatre での演出経験がある。Macbeth を演じるのは、London で公演中のミュージカル *Hamilton* でこの 6 月まで主役を演じていた Reuben Joseph である。彼は Scotland 生まれだが、その他の役者たちもほとんどが Scotland 出身で、RSC の舞台を踏むのは初めてである。*Macbeth* は Scotland を舞台にした劇なのだから、当然のことと言えば当然なのだが、終始 Scotland 訛りの英語でセリフが語られる。Scotland 訛りの Macbeth を観るのは初めての体験である。劇が始まると、舞台の床が開き、舞台の下から、黒と銀色の菰のような衣装を身に纏い、暗澹たる地獄の世界をこの世に持ち込むかのように、三人の魔女が登場する。三人のうち一人は男優が演じていた。三人の魔女はいったん舞台に登場すると、自分の出番ではない時も、舞台のどこかに佇み、劇の進行を見守っている。劇全体が魔女たちの手の中にあるかのようなようであった。魔女たちがもたらす毒気をふくみ淀んだ空気のせいで飛べなくなったのか、突然空から鳥の死骸が落ちてくる。よく空からものを落とした蜷川幸雄の演出を彷彿させた。原作では、この魔女のところへ、戦勝の武将 Macbeth と Banquo が登場するのだが、その前に、本演出では、魔女の予言の中で Macbeth に与えられることになる領地の領主であった反逆者 Cawdor の処刑が舞台上で行われる。舞台上で死者が出ると、魔女たちはシートを持ってきて、遺体を乗せ、あたかも自分たちの国へと死者を運んでいく。凱旋の二人の武将のうち Banquo は女性が演じていた。二人を迎えるのは国王ならぬ女王 Duncan である。Duncan の二人の息子 Malcolm も Donalbain も女優が演じていた。男優が足りないのかとも思ったが、だとすれば、魔女の一人に男優を起用することはなかったはずだ。男性役に女優を起用した演出の意図がわからなかった。

Wilson の演出で注目されたのは Macbeth と Lady Macbeth が女王 Duncan を殺害した直後の

Comic Relief と呼ばれる Porter の場である。Wilson はコメディアン・脚本家である Stewart Lee に、Porter の場の全面的書き換えを依頼した。Stewart Lee は the Comedians' Comedian と称されるイギリスの最も有名なコメディアンである。舞台上演したのはスコットランドの女優 Alison Peebles である。女優が Porter を演じることは時々ある。彼女が舞台上に登場すると、役者の一人がマイクロフォンを用意する。マイクロフォンに向かって Porter は、この日発表された GCSE の結果に触れたり、昨今のイギリスの政治状況に触れたりして、面白おかしく観客に語り掛ける。観客が笑い転げる時もあるが、*Macbeth* という劇の進行にそぐわない気がした。その他に、*Macbeth* の部下で、*Macbeth* の世話をしていた Seyton が、*Macbeth* の戦況不利と見るや、荷物をまとめて逃げ出す場面を新たに加えたり、Duncan 殺害時に *Macbeth* と Lady *Macbeth* の両掌にこびりついた Duncan の赤い血糊が劇が終わるまで消えずに残っているといった、これまでにはなかった演出がいくつもあった。その中で最も興味深かったのは、劇の最後、Malcolm が王位について退場した後、Banquo の息子 Fleance だけを舞台に残し、しばらくその場に佇ませた演出である。Banquo は「国王にはならないが国王を生む」という魔女の予言も実現するのではないかという可能性を観客に感じさせて、舞台は暗転した。Shakespeare's Globe Theatre の *Macbeth* よりは説得力もあり、楽しめたが、残念なことに、以前の RSC の公演と比べると、役者たちの演技の質がかなり低いと思った。

コロナが下火になって、劇場に観客が戻ってきた。コロナ禍で劇場を去らざるを得なくなった役者・演劇関係者も劇場に戻り始めている。次の3年間の政府の補助金の交付方針が変わって、コロナで打撃を受けた劇場の中には、さらなる苦境に立たされる劇場も出てくることであろう。イギリスの演劇の発展を願いつつ、今後とも演劇界がどのように歩んでいくか注視したい。

本稿の執筆にあたっては以下のサイトを参照した。

<https://www.theguardian.com>

<https://www.standard.co.uk>

<https://www.londontheatre.co.uk>

<https://stagecalendarcv19.com>

<https://www.jetro.go.jp>

その他、各劇場のホームページ

(酒井 記)